

第五回 民話 ゆうわ座 ― 話に遊び 話を結び 座に集う ―
いまここにも開いている民話の入口 ― 『民話のなかのキツネたち』 ―

目次

1. 「民話 ゆうわ座」について	進行 小田嶋 利江	p.3
(記録 小野 津仔)		
2. 伝承の語り手が語る『キツネ話』の映像を観る		p.5
『キツネの見込み ^{ちび} 遅え』伊藤正子さん(宮城県登米市迫町新田・大正十五年～平成二十九年)		
(記録 小野 津仔・加藤 恵子)		
3. 採訪者の目でとらえた『キツネ話』について	話題提供 小野 和子	p.7
(記録 加藤 恵子)		
4. さまざまなキツネたちの姿 その一	進行 島津 信子	p.12
『キツネとツブの競走』佐久間 クラ子		
『海をわたったキツボ』堀之内 優樹		
『キツネのあん餅屋』柴田 民雄		
『キツネと法印さま』小野 津仔		
『偽本尊』山田 和郎		
(記録 島津 津子)		
5. みなさんと感想や意見の交換 その一		p.22
(記録 加藤 恵子)		
6. さまざまなキツネたちの姿 その二	進行 山田 裕子	p.27
『キツネと小太郎』目黒とみ子		
『医者先生とキツネ』長須賀直子		
『キツネと産婆さん』倉林恵子		
『キツネにひかされたお婿さん』及川敏恵		
(記録 山田 裕子)		
7. みなさんと感想や意見の交換 その二		p.34
(記録 小田嶋 利江)		

第五回 民話 ゆうわ座 各担当者

〈当日〉	司会進行	小田嶋 利江・島津 信子・山田 裕子
	話題提供	小野 和子
	語り	及川 敏恵・小野 津仔・倉林 恵子・佐久間 クラ子・柴田 民雄・ 長須賀 直子・堀之内 優樹・目黒 とみ子・山田 和郎
	板書	瀬尾 夏美
	撮影・録音	酒井 耕・長崎 由輝・福原 悠介
	SMT スタッフ	田中 千秋・田中 望
〈記録〉	文字起し	小田嶋 利江・小野 津仔・加藤 恵子・島津 信子・山田 裕子

第五回 民話 ゆうわ座 一話に遊び 話を結び 座に集うー
いまここにも開いている民話の入口ー『民話のなかのキツネたち』ー

〇はじめに

田中 千秋（せんだいメディアテーク）

これから、「考えるテーブル 第五回民話ゆうわ座」を始めます。みなさんのなかには、すでに参加されたことのある方もいらっしゃるかもしれませんが、この『考えるテーブル』は、人々が語り合いながら、震災復興や地域社会、表現活動について考えていくための対話の場として、メディアテークが震災後から始めております。さまざまな協働団体さんとメディアテークがホストをつとめまして、ライブで語り合う活動をしており、今回のゆうわ座にかんしましては、みやぎ民話の会の「民話声の図書室」プロジェクトチームのみなさんにお世話になって行われます。

「民話声の図書室」プロジェクトチームでは、ゆうわ座の他に、伝承の語り手さんの記録を、映像記録で残したり、音声記録をデジタル化する活動などを行っておりまして、現在、DVDの方は、十八本貸し出ししており、みなさんお借りすることができます。今年度も新しいものを製作中でして、今年の4月には新しいDVDをみなさんにお届け出来るかと思います。

まず、ゆうわ座を始める前に、いくつかお願いがあります。まず、この会は、メディアテークの事業記録として映像と音声、そして写真記録をおこなっております。後日そのまとめたものをDVD化しますので、みなさん、来れなかった方に見せたいというときも、そちらで借りて見ることができます。また、これに伴いまして、なるべく個人が特定されない範囲で記録を行いますので。でももし、どうしても出たくないという方がいましたら、会場に立っている、われわれスタッフの方へお声掛けください。

次にこの会は、途中入退場自由となっております。三時間という長丁場でございますので、途中から身体を動かしたり、お手洗いなどは、随時とっていただければと思います。また今日は、比較的暖かいとは言っても、出入り口すぐそこですので、寒いと思うので、みなさん防寒具、上着とかは来て、寒くないような格好でのぞんでいただければと思います。

それでは長くなりましたが、今日こちらにいらっしゃいますのが、今日民話を語っていただくみなさん、みやぎ民話の会の語り手のみなさんです。（拍手）そして、民話声の図書室プロジェクトチームの、今日進行等を進めますみなさん。（拍手）最後なんですけど、前に黒板のようなものがあるんですけど、こちら、この会の内容をグラフィックとしてまとめてもらってます。瀬尾夏美さんが、板書の方をしていただきますので、ぜひ帰りとかに、「ああこうゆうことを話したんだ」と振り返る機会になりますので、見ていただければと思います。（拍手）

記録 小田嶋 利江（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

1. 「民話 ゆうわ座」について

司会進行 小田嶋 利江（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

みなさんこんにちは。仙台でも寒気の底のような時期に、これだけの方にわざわざ足を運んでいただきまして、ほんとうにありがとうございます。

これから「民話ゆうわ座」の第五回を始めたいと思います。第五回のテーマは、『今ここにも開いている民話の入り口 民話の中のキツネたち』でおつきあいいただきます。

【『みやぎ民話の会』と『民話声の図書室』】 まず私は、さきほど紹介していただきました「民話声の図書室プロジェクトチーム」、これはみやぎ民話の会の有志で作るものですが、小田嶋利江と申します。三時間かかる長丁場ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

考えるテーブルの中の民話ゆうわ座というのは、民話の不思議な森にみんなで分け入って、そこで驚いたり、考えたり、楽しんだりしながらみんなでワクワクするような時間を過ごしたいという集いです。

まず最初に「民話ゆうわ座」という名前について、前も参加いただいた方には説明したことなんですけれども、また改めてこの名前から説明させていただきます。

【民話 口から耳へと語り継がれてきたお話】 民話というのは、みなさんいろんな意味で使われますけれども、我々が意味する民話というのはある特定のお話というか、物語です。どういう物語かというと、耳で聞かれて、それが口で語られて、さらにその語られたものを耳で聞かれて、口で語られるというように、耳から口へ、口から耳へと語り継がれてきたお話をいいます。民話というのは、そういうふうに声を仲立ちとして語り継がれてきたものですから、文字で書かれたお話とは違って、もっと広いお話を含んでいたり、あるいはもっとさまざまな忘れられてしまうような思いも、多分そこに含まれているんじゃないか、語り込められているんじゃないかと思われまう。

【民話の深い森】 そうしたのが民話の世界なんですけれども、その民話の世界はよく深い森にたとえられます。なぜかと言いますと、民話というのは、今言ったように、口から耳へ耳から口へと延々と語り継がれて今私たちの所まで、長い長い旅をしてきたものですよね。だからその間に、語り継ぎ語り継ぎしてきた人たちの、何代もの何人もの人々の、そのときのさまざまな思いを語り込んでいるんじゃないかと考えるんですね。たとえば現実に生きる辛さですとか、苦しみですとか、その中から生まれてきた知恵ですとか、いろいろな思い、切なる願い、そうしたものが語り込められているんじゃないか、と考えています。

【採訪と記録】 私たちみやぎ民話の会は、そうした民話が聞きたくて、海とか山とか里とかにいる語り手お一人お一人をまず探して、お訪ねして、そしてその方をお願いして、「どうぞお話を聞かせてください」とお願いして、お話を聞かせてもらいます。それはとっても面白くて、楽しくて、なおかつ考えさせられて、とっても興味深いんですけれども、私たちだけでそれを持っているのはもったいないので、他の人にも、みなさんにも知ってもらいたいなと思って、いろいろな形で記録をする活動を、四十年ほど続けてまいりました。

そうした海や山や町に住む語り手の方々お一人お一人を訪ねて、それからその方たちから声を仲立ちとするお話たちをお聞きすることを、われわれは「採訪」と呼んでいます。「採訪」の採は採用の採ですね。訪は訪問の訪です。お訪ねしてお話をお聞きするので採訪と言ってます。

その採訪のときどきで、さまざまなことを目にしたり耳にしたりするんですけれども、そうしたことたち、採訪の時の体験が、じつはお話されたさまざまなお話、民話のいろいろな深みですとか、表情ですとか、その顔立ちについて、それを深く考える手掛かり、入り口になることがよくあります。

【民話ゆうわ座】 今回の「民話ゆうわ座」というものは、この採訪の体験を入り口、手掛かりとして、そこ

から民話の森へ分け入って、そこで民話の顔だちなり表情なり、その奥に潜んでいる語り込められた思いって何なんだろうって、みなさんといっしょに考えてみたいなという場なんですね。

ここでなんというか、広い視線から考えてみると、こんなふうに語り伝えられてきたお話は、口から耳へと延々と語り継がれてここまで来てるんですけども、もしかしたら、ここで私たちが聞いて考えて語り合うことが、もしかしたら、これから語りをつたえていくための種になるのではないか。あるいは、語り継がれてきた流れの一番はしっこに、位置することができるのでないか、そうなる嬉しいなあと考えまして、それで「民話ゆうわ座」という名前をつけました。つまり話に遊び輪を結び座に集うという意味でゆうわ座です。「遊ぶ」それから「結ぶ」「ゆう」ですね。お「話」と「輪」っかの「わ」ですね。「座」というのは、できればここで聞き語り合ってるみなさんが、われわれも一緒に、語りの座に集うことができればいいなと思ひまして、「座」という名前を付けました。

【民話のなかのキツネたち】 「民話ゆうわ座―話に遊び 輪を結び 座に集う―」ということです。今回で五回目なんですね。一回目は『かちかち山』、二回目は『猿蟹合戦』。三回目は『笠地蔵』、四回目は『食わず女房』を取り上げて、みなさんと聞いて考えてきました。それらはある特定の形を持ったただ一つのお話を、みなさんで聞いて考えてたんですけども、今回はちょっと違ひまして、いくつものお話の中にいっぱい出てくる、さまざまなキツネを取り上げて、それをみなさんで眺めて、われわれも含めて、みなさんのお知恵をお借りしながら、眺めることはできないかというのが今回の場です。

今回たくさんのキツネ話を聞いてもらいますけれども、じつはそれだけではなくて、民話の中にはもっともっとたくさんのキツネたちがいます。あっちにもキツネ、こっちにもキツネ、ほんとにキツネだらけですから、これでは足りないんですけども。できればですね、みなさんはそのたくさんのキツネ話を聞いて、どんなふうにキツネが見えるのか、感じられるのか、どんなふうなことを思われたのか、キツネとどう関わりたいのか、キツネとほんとはこう関わってたんだよとか、いろいろあると思うんですけども、そうしたことを自由闊達に、行き先を定めずに自由に、思ったこと感じたこと考えたことを、表していただければ嬉しいと思います。

記録 小野 津仔(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

2. 伝承の語り手が語る『キツネ話』の映像を観る

小田嶋 利江（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

それではですねさっそくキツネのふわふわのしっぽが、ふわふわと見えるお話の森に行きたいんですけども、まずお話の入り口として、森の入り口として、口伝で伝えられてきたキツネ話がどんなふうに語られているのか、それを味わってもらいたくて、伝承の語り手のキツネ話を聞いていただきます。

語ってくださるのは、宮城を代表する語り手である伊藤正子さんです。正子さんは大正十五年（1926）に、宮城県登米市迫町新田にお生まれになって、お隣に嫁がれて、そこでお暮らしになって、平成二十九年（2017）、昨年ですね、逝去されました。二百話近いお話を記憶されていて、どんな語りの場に出ても全く変わらない語り口で、それから良くとおる声で語りをされていました。最後の時の正子さんの語りを聞いたことは、ほんとに幸運だったと思っています。

それでは正子さんの語り「キツネの見込み^{ちげ}違え」という面白いお話です。お願いします。

* * * * * 以下 映像上映 * * * * *

『キツネの見込み^{ちげ}違え』

語り 伊藤正子さん（宮城県登米市迫町・大正十五年生まれ）

キツネの見込み^{ちげ}違え

小野：こんなふうに人間の世界によくやってくる、昔話にいちばん出てくるのはキツネですよねえ。

伊藤：そうだねえ。

小野：キツネいっぱい出てきてはねえ。

伊藤：キツネの話はいっぱいあります。正子さん、キツネの話いくつか教えてくださいませんか。

伊藤：キツネがかえって命をとられたキツネのこと？

小野：ああ、うん、うん。

むかあしむかしね。

一匹のキツネがね、

「ああ、腹へったなあ。腹へったなあ」

って山の中歩いてたんだと。小(ちっ)ちゃこいキツネだったと。

そして、なんかふらふら歩いてたら、なあんと生きのいい^{おっ}大きなタイ見つけたんだと、山の中にね。それは、お振舞^{ふるめえがえ}帰りの人たちの荷駄の中がら落ちたタイだったと。腹減ってたキツネは、

「ああ、これはいいの見つけだあ」

と思って、がぶっとかじりついたと。そしたら、うまいうまい、うんとうまがったと。キツネが、がぶっとかぶついて一口食ったとき、向こうの方がら一人の男^{おどこ}のお爺^ずつあんみでな人がきたと。

「あらららあ、俺せっかく見つけたタイ、これ食いようねえなあ」

と思って、口にくわえて逃げようとしたげっとも、小ギツネだもの、とっても重くて、そのタイを持って山さ逃げようもなにもながったんだと。そして、キツネは考えたど。

「ああ、ようし。俺がこのタイを一口食って、ああ、死んだふりしよう。そしたら、あの男^{おどこ}の人は、

『ああ、このタイに毒あんだなあ。毒あって、このキツネあてられて死んでしまったんだなあ』と思って持って行かないべえ」

と思ったキツネがね、ころっとそごさ横になって死んだふりしたと。

そしたら、その男^{おとこ}の人が歩いてきたど。こう足でキツネんどちょっと押したっけど。そたしたら、

「ああ、死んでる。これは毒あったタイ食って死んだんだなあ」

って、そんなこと一言いいながら、

「ああ、毒食って死んだキツネだこれ」

って通っていった。

そして、また姿見えなくなったらね、キツネむくっと起きて、そのタイにかぶついただと。そしたら、その男の人がさっさと戻って来たど。

「あっ、まだ来た」

と思ったキツネは、またころっと横になって死んだふりした。

そしたらその男の人近づいてきてね、

「なあに、毒があるタイ食って死んだキツネだって、なんのキツネの肉食^かねげりゃいいっちゃ。毒食^くったキツネでも毛皮にして売れば、これは^{じょに}銭なるなあ。よおし」

と思って、そのキツネ捕まえた。

そのキツネね、人をだまそうと思ったら、かえって命取られてしまったんだって。

えんつこもんつこ さげしたと

小野；キツネが目論んでたことが外れちゃったんですねえ。毒食って、毒のタイだからって見逃して行ってしまうと思ったのにねえ。キツネだけでも毛皮にすれば儲かるってねえ…

伊藤；首まき用にすれば金になるって思って、生け捕りにされてしまったんだと。

* * * * * 以上 映像上映 * * * * *

いかがでしたか。とっても気の毒なキツネが出てきましたね。耳から口へ口から耳へというふうに語り伝えられてきたお話、キツネ話っていうのは、例えばこんなふうな味わいを持って語られています。なんかキツネの浅知恵と言うにはあまりにもなんか気の毒で身につまされるお話なんですけれども…。

さて、いよいよ沢山のキツネ話を生の語りで聞いていただきたいんですが、その前に、語り手の暮らしに採訪の時にふれますと、様々なお話の姿とか表情を考えることができる手がかりがいろいろあったりします。そうした、採訪の中から考えてみたい、採訪者の目から捉えたキツネ話の特質について、プロジェクトチームの小野和子さんに話題提供をしてもらいます。よろしくお願いします。

記録 小野 津仔・加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

3. 採訪者の目でとらえた『キツネ話』について

話題提供 小野 和子（みやぎ民話の会 「民話声の図書室」プロジェクトチーム）

こんにちは。ご紹介いただいた小野です。よろしくお願いします。

【人とキツネ やったりやられたり】今、正子さんが語ってくださった「キツネの見込み違い」、これはキツネが人間にいっぱい食わせてやりましようと思って、キツネは食べた鯛に毒が入っていたふりをしてごろんと死んで、そしたら人間がまた鯛を置いていくかもしれないと思ったのに、人間のほうが一枚上手で、鯛には毒があっても、キツネの毛皮だけでも儲かるかもしれないと戻ってきて、結局連れ去られて、人にキツネの知恵が負けたっていいですか、人にやられちゃった話なんですよ。この話のあとにね、正子さんはね、もう一つ話をしておられるんですよ。それはね、こんな話なんですよ。

すぐそこのおんちゃんの話だけどねえ。酒飲むの好きな人で、どっかの棟上げ式に呼ばれていって、ご馳走たらふく食べて、そしてお酒もいっぱい飲んで、いい機嫌でぶらりぶらりと土手道歩いて帰ってきたら、向こうからきれいな女の人に来て、「おんつあん、こんばんは」って言うから、おんつあんも、ふらふらと寄っていって、「こんばんは」って言ったら、^{おらい}「俺家でいい風呂わいてるから、ちょっと寄って風呂でも入って、酒の一杯も一緒に飲みましょう」って言うわけね。それで、つかうかとかついていったところが、「さあどうぞ」って言われて、ぬくぬくしたお風呂桶に湯気が立ってたんで、喜んで入って、「ああ、いい湯だ。いい湯だ」って、頭に手ぬぐい乗せていたのね。そしたら、「なんだあ、おとつあん。なにしてんのっしやあ」って、自分の女房の声が聞こえてきたんで、はっとしたら、なあに、風呂だと思って入ってたのは肥桶^{こえおけ}だったって。肥桶って、若い人には分かるんでしょうかね。昔は、トイレから汲んでいった肥を桶に入れて溜めておいて、それほんとにきれいになるんですよ、見せていただいたことあるんですけども。それを、春になると、最初に畑に撒くわけです。その肥桶に首まで浸かって、「いい湯だ。いい湯だ」って言ってね。そいで女房に怒られたって、こういう話がついたんです。

さっきは、人にやられたキツネの話でしたね。でも今度は、人間がキツネにやられた話で、そして、今言いましたように、「これ、そこのおんちゃんの話なんだよ」って、実話として語られているんです。

【キツネと気脈通じる】本当のことを言いますとね、お話を聞きにいって、なんか話の糸口が欲しいなあっていうようなときに、「あの、この辺にキツネにばかされた人いませんか」って聞くとね、大抵にこっとされて、困ったような顔しながら、「ううん。あそこのな、局のおんつあんつう人は、よくキツネに通じる人でなあ」なんて、その局のおんつあんの話になるわけですね。

そして、「あるとき、おんつあんが大きな松の木に、こうしっかり組みついてはっけよい、はっけよい」って言ってるから、「何してんだ、おんつあん」って言ったら、「おら、今関取と相撲とってんだ、見ろ」って言って、よく見たって松の木しか見えないのに、「なんで関取だ」って言うと、「お前(めえ)に見えねえのか。ほら、立派なお相撲さんとおら相撲とってとこだ」なんて、けろっとして言う。そして、こんどその局のおんつあんと一緒に茅刈りなんかに行くと、「ほら見てみろ。あそこで、キツネがでんぐり返って、尻尾ゆうらりゆうらりさせて、こっち呼んでっぺ」なんて言うんだそうです。「でも、俺には見えねえのさ」って、語る人が言うのね。そして、「局のおんつあんという人は、キツネとどっかで気脈通じてんでねえべかなあ。キツネに気脈通じる人間つうのがいるんでねえべかな。局のおんつあんみてると思うんだ」って言うんです。おもしろい言い方でしょう。「キツネに気脈通じている」ってというような言い方。

【キツネにひかされる、ばかにされる】よくキツネにばかされるとか、キツネにだまされるとかという言い方を一般的にしますけども、例えば、私なんかが民話を聞きにいって、語ってくださる方の多くは、「キツネにひかされる」って言うんです。ばかされたって言い方をほとんど聞かないんです。「キツネにひ

かされた」って言う。そうでなければ、「キツネにばかにされた」って言い方が二番目に多いんです。大勢の方にキツネの話を聞いて、キツネにやられたことをなんておっしゃるかなあって、数を数えてみたことがありましたが、「ひかされた」っていう言い方が非常に多いんです。不思議でしょう。

そして、「おんつあん、キツネにひかされたんだ」って言うと、なにかキツネの世界が、人間の世界の隣にあって、そこへ行ったり来たりしながら、それこそ気脈を通じて共存しているような印象さえするわけですね。「ひかされた」ってこと言葉に込められた思いの中には、人々が、キツネをどう捉えていたかということが、少し潜んでいるような気がいたします。

それから、「おら、キツネにばかにされたんだ」って、自分の話でおっしゃるような方もおられるんですけども、「ばかにされた」って言うときには、私たちがよく、「あの人は私のことばかにしたのよ」なんて言うときには、その人も人なんで、対等な人間なんですよね。対等な関係があるから、ばかにされたとかそうやって怒ったりするわけですね。「おらあ、キツネにばかにされたんだ」っていう言葉を言われるとき、いつも私は、その方がキツネと対等になんかつきあっていて、キツネにばかにされて困った目にあっただとおっしゃるような気さえするわけなんです。こういうキツネとの対応で漏らされた小さな言葉、「ひかされた」とか「ばかにされた」とかということで、キツネと人間の関係が割合とよく探っている糸口になるんじゃないかと思っております。探り切れてはおりませんので、またみなさんに後でご意見を聞きたいと思いたすけれども…。

【人と動物 関わりいろいろ】 私達の先祖は、長い年月の中で動物と暮らしを共にしながら、多くの動物を人間の手の下におさめてまいりましたね。例えば、ウシとかウマとかイヌとかネコとか、まあサルもいいですけど、人間の手の下で使っていけるような家畜として働かせるような、そんなふうな動物たちの群れも作ってまいりました。そうでないかと思えば、こんどは、クマとかオオカミとかシカとかっていうふうに山奥で一定の人間に距離をおいた処で別世界を作る動物たちの一群も作ってまいりました。

そこへいきますとね、キツネは割合に人間の世界のすぐ傍に居るんです。すぐ傍に居るのに、少しも人間に手なづけられないで、野生を保ちながら独自の世界を形成して行って、そして、絶えず人間の世界を取り巻いて、ちょっかいをかけたり、なにやらかにやらをしているというふうに、そんな位置づけをすることができるんじゃないかと思います。

【キツネにひかされた人 男女の違い】 「そんなことは、昔の話でしょう」って言われるかもしれません。より多く昔の話ではありますけれども、ついこの間もね、王城寺原の自衛隊の隊員さんが栗拾いに行ったままちっとも帰ってこなかったそうです。それで、探しに行ったところ、大きな栗の木の下で胡座をかいて、にこにこにこにこ笑って、頭の上に栗の葉っぱを載せていたんだよって。見つかったんだよって。それから、隊では、「あいつキツネにやられた。あんな処でひと晩過ごして、にこにこにこにこ笑ってた。まあ、たいした奴だ」っていうようなことで、むしろキツネにひかされていった人たちを一種の人気者のように扱っているむきもあるんですね。

ところがね、これは男の人に対してだけなんです。これが、女性に対してになると、同じ「栗拾いに行つて、三日も帰ってこない娘さんがあったんだよ。探し探して行ってみたら、山奥のやっぱり栗の木の下で倒れていた。着物もなにも引き裂かれて、体中血だらけになって、真っ青な顔して、死んだようになって倒れていた。連れて家へ帰ってきても、その後は、どうもいっぺんキツネの処に足を踏み入れたらしくて、ちいとばかりキツネのようになってしまったよ」なんて言われるの。

不思議なんですけども、たくさん聞くキツネ話の中で、男に対してはキツネは実に寛大なんです。せいぜい肥桶にお風呂だなんてだまして入れるくらいで、体中引き裂いたり死ぬ目に合わせたりするようなことをキツネは男にはしない。でも、女性がキツネにひかされていった話は、ほとんど悲劇的なんです。そん

な話をまた後で語ってもいただきますけれども、個々にキツネは何をもってそれを区別してんのかなあという気がすることもあります。

【動物と人間の結婚の話】 女と男ということでキツネに結びつけて言いますと、みなさんはすぐに「葛の葉」の話を思い出されるかもしれません。これは女のキツネが、人間の男の処へ嫁いった話ですね。そして、そこで子どももなして、ある程度大きくなったんだけど、ある日、自分がキツネであることが分かってしまったためにその子と別れて、泣く泣く信太の森へ帰っていくという、涙をこぼして聞くような話で、芝居にもなっていますし、いろんな形でこの話は、沢山の人の心に残っているらしくて、よく聞かれます。これにちょっと類似したものも後で語っていく話の中に入っておりますが、私は、この「葛の葉」のキツネの話を思い出すたびに、ひとつとても心に残ることがございます。

動物たちが人間の世界に嫁にくる話は、結構民話の中にはあるんですよ。例えば、みなさんがよくご存知の話でいえば、「ツル女房」がありますね。ツルが嫁にきて、自分の羽をむしって機を織って、そして、羽をむしって織っているところを見られちゃったので、逃げ帰っていくというようなツルもいますし、それから、「コイの女房」なんて池のコイが、やっぱり助けて貰ったお礼で女になって来こともあるんですね。そうすと、そのコイの女房は、毎日美味しいお汁を作ってくれる。お汁を作るときには、尻尾をお汁の中に入れて、ぴらぴらぴらぴらさせて、腹を出していい出汁をとってくれるというような、そこを見られてしまってコイだっていうことが分かって、泣く泣く帰っていくなんて話もあるんですね。

【『葛の葉』の影】 その他にも、ヘビでもサルでも人間の処に女が嫁にくる話は一群れあるんですけども、「葛の葉」のキツネだけ著しく違うなあと私が思いますのは、「葛の葉」のキツネが正体を見破られるとき、そこに影があるんですね。今言いましたように、「ツル女房」だったらツルの羽をむしる、「コイ女房」なら尻尾を振って出汁を出す。ヘビだったらとぐろを巻いて、赤ん坊手の上に乗せるというような、その動物が本来備えている性質をむき出しにしたときに、その正体が見破られるというのが、民話の中の一つの形なんですね。

ところが、「葛の葉」のキツネだけはそこが違って、より多く語られる姿では、その子どもにお乳を与えているときに、ふっと気が緩んでしまったキツネの女の影が障子に写ったっていうんです。その障子に写った影に角があったって言うの。そこで、「ああ、これは人間じゃない。キツネだ」ということがばれた。影によってばれたっていうこの非常に抽象的な、あるいは象徴的なキツネの姿が暴露されていくところは、私はちょっと忘れることができないのですね。

みなさんもお存知のように、私どもの先祖は影というものを非常に大事にしました。影こそ本体というように、こうしている自分自身は空蟬の仮の姿で、影の中に本体があるという思想を持っていたことは、みなさまご存知の通りです。

私が山奥で出会ったお婆さんなんかは、美しい人を表現するときに、「影さすように^{うづぐ}美しい女^{おなご}なんだ」
って言うんですよ。光り輝く美しい女という言い方ではなくて、「影さすように^{うづぐ}美しい女^{おなご}いてな」って、
こういうふうに影という言葉が使われるんですね。

【人間がキツネに背負わせたもの】 そうすると、「葛の葉」のキツネの中で、その影によって見破られてしまったという本質を解くときの「影」という存在を、私はやっぱり忘れることができないんです。これをどんなふうに考えていったらいいのかなあというふうに思うわけですね。他の動物ではなくて、キツネにだけ人間が背負わせた何かがあるような気がしてならないんですね。

そして、キツネに与えた役割。人間と共存するもう一つの不思議な動物としてのキツネに与えた役割。そういうものを私たちは、もう一度振り返ってもいいんじゃないかなという気がするんです。そして、こんなにキツネがしょっちゅう出てきて、身近な人を実際にひいていたり、ばかにしたりするという例は外国に

はほとんどないと言ってもいいんですね。日本特有のものと言ってもいいかと思うんですが、こんなにキツネたちが、私たちの身边で出没して、私たちの世界を良きにつけ悪きにつけ色どってくれているということは、一体なんだろうかと、私なんかはよく考えさせられることであります。

【キツネにひかされる人】ところでね、キツネにひかされる人は、どういう人がひかされると思いますか？あるいは、みなさんはキツネにひかされたことがおありでしょうか？この中にキツネに自分はやられたことがあるってという人はいらっしゃるでしょうか？今思い出せないかもしれませんが、もしおありだったら教えていただきたいんですけども。

あのね、こういうことを言われるんですよ。「キツネにひかされる人っていうのはなあ」って、語り手がおっしゃるんですよ。「あのなあ、ちゃんとキツネは見ているんだ。そしてね、うんと賢い人はひかさないんだ。うんと利口たりない人もひかさないんだ。中くらいの人だけひかすんだ」って言うんですね。だからみなさんが、もしキツネにひかされたことがなかったとしたら、みなさんは、うんと賢い人か、そうでなかったらうんと利口たりない人かどっちかなんですね。大体、自分は中くらいだと誰でも思っているんですけども、中くらいじゃないんです。私たちはうんと賢いか、そうでなかったら利口がうんとたりない人か、そのどっちかになるんじゃないかなあっていうふうに思うんですよ。

【いま、キツネはどこへ】そして、さらにもう一つ最後に申し上げたいのは、「じゃあ、今キツネはどこへ行ってしまったの？」「キツネにひかされた人は、最近でもいるの？」って。実はいるんですけども、昔のように表に出てこないんですよ。

じゃあ、キツネは一体どこへいったんだろうっていうと、ごく物理的に考えると、「世の中がこんなに明るくなっちゃって、電灯が夜中でも灯ってるから、昔ならキツネ火がパッパッパッって山の際にいったのに、今じゃ明るすぎて、キツネ火が灯らねんだよ」なんてことになったり、あるいは、「キツネの餌であった野ウサギがいなくなっちゃって、食う物がなくなっちゃたから、キツネが姿を消したんだよ」とか、その他にもいろんな合理的な理由といたしますか、そういうことでキツネがこの世にいなくなっちゃって、私たちの身边は、キツネを失ってしまっているような気配なんですけれども、本当にそうかなあって、ふっと思ってみていただきたいんですね。

私は、その辺に今日もキツネが来ているような気がするんですよ。そして、その姿をみんなの前に見せにくいから隠してはいるんだけど、キツネたちは、きっと私たちのこの世界を、今は違う形で、スマホやなんかがあるような形で、キツネとしての存在をどこかここかで気配として醸し出しながら存在しているのではないかと思います。

【キツネを感じる力】むしろそれを感じる力を私どもが失っているから、人間だけがこの世に生きているような気がしておりますけれども、実は、キツネたちはそこここに今もいるのではないかなあって、こんなことを言うとみなさんにばかにされちゃうかもしれませんが、私は、そんなふうに思っているわけなんです。

本当に数しれないキツネの話をお聞きしてきたんです。いろんな形で、手を変え品を変えて、先祖はキツネの話を残してくれました。それを今から、そこにおられる方々に語っていただきますので、それを聞きながら人間にとってキツネってなんだったんだろうか、今そのキツネはどんな形で私たちの身边にいるんだろうかっていうようなことを一緒に考えていってみたいと思います。

【稲作とキツネ】稲の問題を言うのを忘れてしまいましたけども、キツネはね、お稲荷さんに祀られて、稲の神さまなんですよ。そして、田の神さまのお使いとも言われてるんですね。農耕とも関係があると言われてはいるんですけども、浅学な私は、そのことについて詳しいことをよく分からないんですけども、お稲荷さんと言われるように、稲をもたらししたのもキツネであり、稲を守ってくれるのもキツネである

というような思想も厳然として存在しております。そのような話も、今日語っていただく中にありますのでお聞き下さい。

小田嶋一ありがとうございました。いろんなことを話題提供していただきました。

実話ということの問題とか、男女でお話に違いがあるとか、それから人の世界が、もしかしたらキツネの世界に地続きで繋がっているんじゃないかしらってということとか、「葛の葉」の影の問題なんかとっても深い問題だと思います。それから稲の問題とか、そうしたいろいろなキツネ話の特質を今は頭の隅に置いておいていただきたいと思います。キツネ話をこれから沢山語っていただきますが、実は、十話もありますので、その一とその二の、前半後半に分けさせていただきます。

語りをしていただくのは、みやぎ民話の会で語りの勉強をしております語りグループの仲間たちです。「さまざまなキツネたちの姿 その一」として、まず五つの話を語っていただきます。進行は、プロジェクトチームの中の島津信子さんです。よろしくお願いします。

4. さまざまなキツネたちの姿 その一

進行 島津 信子（みやぎ民話の会 「民話声の図書室」プロジェクトチーム）

それでは、「さまざまなキツネたちの姿、その一」ということで進めさせていただきます。キツネの出でくる昔話っていうのはたくさんあります。その中から、まず五つの昔話を聞いていただきます。

一番はじめに語ってもらうのは、『キツネとツブの競走』というお話です。みなさん、ツブってご存知ですか。おわかりと思いますけども、田んぼの泥の中に棲んでいてカタツムリみたいな格好の生き物ですけども、タニシとも言いますよね。そのキツネとツブの競走の話です。佐久間クラ子さんが語ります。

『キツネとツブの競走』

語り 佐久間 クラ子（みやぎ民話の会）

キツネとツブの競走のはなし。

むかあし、あったと。あるところに、ツブがたぁんといる田んぼがあったそうだ。そこにあるとき、キツネがやって来てツブを馬鹿にしたんだと。

「ツブ、ツブ。おめえたちはなにしてんだ。年中、泥さつつぶぐったり出てきたり、つつぶぐったり出てきたり。おめえたちはろくに歩くこともできねえんだべ」

そう言ったら、中にきかねえツブがいて、

「なに語る。おらたちだって歩けんだぞ。競走してみっか」

そう言われて、キツネたまげちまった。

くなゝに、競走するだど。おう、なまいきなツブだ。したが、ツブのほうから競走すっぺって言うんだから、ほれ暇^{ひま}つぶしにやるのもおもしろな

と思ったんだと。

「ほんじゃあ、競走してみっか。あの向こうの池まで、どっちが先に着くか競走だぞ」

「ああ、よかんべ」

となった。

ツブというのはたいそう賢かったもんだから、

「ほんじゃあ、出だすぞお」

って出たときに、ひょいっとキツネの尻尾^{しっぽ}に掴^{つか}まったんだと。

キツネつつうのは、尻尾を振り回しながら跳ねてくんだと。キツネ、ほれ出だすぞっとひょんひょん尻尾振り回しながら行けば、ツブはしっかり掴まって、てってって。ほれ着いた。キツネがひょいと止まれば、ツブ、するするっと尻尾から下に落ちて、キツネの目の前で、これ、

「なあんだ、いま来たのが」

って言うもんだから、キツネ、たまげちまって、

「なあんだ、おめえ、早^{はや}えなあ。いつの間に来たんだ。よし、今一度」

となって、またそれ行くぞと行けば、ツブはキツネの尻尾にちょいっと掴まって、てってってって。つ。

「ほれ、着いた」

と、ひょいと止まれば、ころころっと出て、

「今来たかい」

って言う。まあ、キツネ悔しくて悔しくて、なんべんやってもツブのほうが勝ったんだと。

おしまい（拍手）

〔話 佐久間クラ子さん(昭和七年生)／日本民話の会編『佐久間クラ子の語り』より〕

キツネとツブと動物同士が競走する昔話です。キツネとツブが競走したら、体が大きくて四本の足を持っているキツネが勝つだろうと誰もが思うと思います。キツネだってそう思ったから、ツブの挑戦を受けたわけですね。ところが、結果は足もあるかないかわからない、体の小さいツブが勝ってしまいました。自分の尻尾にすがりついて運ばせられるなんて、知恵自慢の、体力自慢のキツネにしてはしてやられたもんだなあと思います。ちょっと他の話では、尻尾にすがりついたツブがいて、ゴール寸前で油断したキツネがちょっと振り向いたんだそうです。その時にびよんとツブが落ちたんで、先にゴールしたなんていう話もあります。

キツネと動物同士の昔話っていうのは、他にも似たような話があるんですけども、『尻尾の釣り』ってご存知でしょうか。これは、ずる賢いキツネがカワウソの捕った魚をたらふく食べて、もっと魚を取ろうと思って、カワウソに教えてもらって自分の尻尾を川に浸す。そうすると凍り付いてしまって尻尾が取れなくなってしまった話ですね。これは仕返しされるわけですけども、キツネと水辺に住む動物たちの勝負というか、そういう話になると思います。どちらも山に棲む動物であるキツネと水辺の動物たちの闘いは、水辺の動物たちの勝ちということになりそうです。

では、もう一つ、動物同士の昔話を聞いていただきます。『海をわたったキッポ』、ちょっと長い話になります。キッポっていうのは、「小さなキツネ」という意味のようです。堀之内優樹さんが語ります。

『海をわたったキッポ』

語り 堀之内 優樹（みやぎ民話の会）

海をわたったキッポ。

なあぜ、日本にはライオンだのヒョウだの、いねえんだと。おかしはいたんだと。

ライオンだのヒョウだのが日本にやって来て、日本の^{ケダモノ}動物だちをいじめてしゃないってんだなあ。んで、日本のケダモノだち、寄って会議開いだんだと。

「なんとかして、来^こねえようにでねえか」

だれか使いを立てっぺつつうことで、だれがいがんべ、だれがいがんべって考えだけって、やんだ、やんだってだれもいねえんだって。行くには行っても帰ってこらんね。だって、ネズミがネコの首さ鈴つけてくるようなもんだもの、みんな、やんだっていうんだなあ。

んで、だれがいがんべって考えた。

「クマ、えかんべ」「だれ、えかんべ」

「タヌキ、えかんべ」「だれ、えかんべ」

みんな結局やんだ、やんだって。

さいごにとうとう、キツネがおしつけられた。

「あんたは、人を化かすカあから」

ってね、んで、キツネも最初は「やんだ」つつったんだけど、

「やんだっつったって、とおんねから。貴様^{くさま}行げえ」

「なんだ、しゃねから、みんなの要望だから、行ってこたえてみんべ」

ほんで、キツネが行くことになったんだどや。

「日本からどんなもの来るんだべや」

ってのも、待ってたのしゃ。どんなおっきなもの来るだべと思って待ってたのしゃ。

したら、こんなにちゃっこいキツネっこだもの。

「なぁんだ、キツネっこ来たぁ、キッポだ、キッポだ」

って。

ほんで、

「こいなわけだよこさった」

つつって、

「ほんでえ、ちえくらべすべえ」

とこうなった。

「いかんべや」

ってことになって、ほんでかけっくらしたらいかんべとなった。

「トラは千里行って千里来帰ってくっから、トラとかけっくらしたらいかんべ」となった。

「よし、いかんべ」

となった。

ほんどぎ、キッポ、

「ほんで、おれだちかげの沢^へさ入って、そっからヨーイドンでってかけっくらすっから、ヨーイドンと言ってけらい」

ってお願いしたど。

そんで、その通りトラとキッポ、かげの沢さ入ってヨーイドンでかけたって。

ほんで、トラはいちもくさんにかけた。キッポ考えたって。キッポ、日本代表だから負けらんねえ。

「このままかけっくらしたって、かっつがんねえがら、負けっちまう」

一生懸命に考えたときに、いい知恵出たんだどさ。トラが、ヨーイドンで、かけたときに、その背中さ、キッポ、びょんって跳び乗ってくっつがったんだと。だぁれ、トラの野郎、キッポ、こんなにちゃっこいながら気づかぬがったんだどや。ほんで、トラの野郎、キツネどっから来るんだべって、振り向いたんだ。もうすこしで決勝点に近づいたときに、頭がら体がら、がら一っと振り向いたんだどや。ほんどぎ、キッポ、ぽんっとトラの背中がら飛び降りて、ほんどぎ、ほれ、キッポ、ポンととびおりたんだとや。

「なんだや、トラさん。今ごろがや。おれ、ここですっと待ってだぞい」

「なんだ、おめえ早えなあ」

ほんで、キッポが勝ったことになったんだと。

こんど、戻ることになったって。トラは千里行って、千里帰ってくっかんねえ。

ほんで、またヨーイドンでかけた。

こんどこそ負けらんねえってトラは、ぐんっと出たって。ほんでも、またその背中にポンって飛び乗った、キッポね。ほんで、また、

「なんだや、遅えごだやあ。おれ、ここですっと待ってだぞい」

ほんで、キッポが勝ったごとになったんだと。

ほんで、こんどはライオンだとなった。ライオンは^{しじゅうしこえ}四十四声だもの。ライオンが、ウーッ、ウーッ、ウーってうなると、ケダモノたちみんなだめになっちまうんだよね。

ほんで、ライオン、

「おれは声だから。ほいつさ、こたえてみっか」

って、ウーッ、ウーッ、ウーってはじめたんだと。

ほんで、キッポは代表だから、

「ちょっと待て。おれ、ほのかげさいっから」

って行行ったって。陰さ行ってなにすんだべと思ったら、キッポ、陰さわらわらと穴ほったんだって。

ほんで、ライオンがうなるとにその穴さ頭つつこんでた。なゝに、穴の中さ頭つつこんでだもの、いくら唸ったって聞こえねえべさ。ほんで、キッポ、

「なゝんだや、虫の声みでだなや、^{ようが}夜蚊だと思った」

したっけ、ライオン、

「ほんなごと、あんめっちゃや」

って、また、ウーッ、ウーッ、ウーッって唸ったん。んでも、キッポ、そのたんびに、穴の中さ頭つつこんでいるから、結局敵わねがったんだと。

ほれで、キッポ、まだ勝ったごとになったんだと。

「なんだや、あんだ大したものだなや。日本、寄こしたもんだおなや」

って、ほんで、みんなまいってしまったんだと。

こんどあ、キッポの番だ。

「あんた達、こごさいらいわ。ほんでえ、はじめっから」

「なにすんだべなあ」

って思っていたら、ずっとはるかむこうさ、このくれえな小っちゃい沼掘ったんだと。

「なんだや、あいつ」

ほしたっけ、そごさぽと水が湧いた。

「なんだあ、なに出はってきたんだべ」

みんなで見てだっけ、その水、ガブーッ、ガブーッ、ガブーッっておがってきた。ほんで、みんな入ってしまったんだと。湖の中さ^{へえ}入ってしまったんだねえ。

「いや、いや。キッポ、キッポ、このまんまでおれだち入ってしまう。水の中さ^{へえ}おれだち入ってしまったら、おれたちおどけでねえからや」

ほんで、

「まいったあ」

って、結局、キッポがまた勝ったごとになったんだと。

ほんで、ほんとはそごに湖なんてないのっしや。なにもないのっしや。キッポがほれ、みんなを化かしたんだね。キッポ、それぐらい化かす力があったんだと。

ほんで、ほのとぎ、それがきっかけで、ケダモノだちは日本さは^こ来ねぐなったんだって。

日本にはそんどぎ、稲つつうものねがったつつうもな。んでも、おこうにはあったんだと。支那にはね。

ほんで、キッポ、どうしても、その稲が欲しかった。んでも、監視がきびしいがらどうしてももってこらんねかったんだとね。キッポが欲しいがら、そこらへんうろうろしてだどぎにヨシ見つけ

だ。ほんで、キッポ、ヨシを食っ切って、ヨシのなか^{くだ}が管^{くだ}になってべっちゃ、そいつさモミツブつめて持ってきたんだって。切り口^{でろ}さ泥^{でろ}つけて、抱いできたつうんだなあ。稲、稲荷大明神って、キツネがまつられてるつうのは、ほいづがきっかけだつうんだねえ。

今でも、ヨシ、二本だり三本だり、切り口^{でろ}さ泥^{でろ}つけてそごさしといったもんだ。しきたりだったからねえ。(拍手)

〔話 早坂太作さん(明治四十三年生)／記録 小野和子〕

とても壮大なお話ですよ。日本の代表としてキツネが外国に渡って勝負してきた。外国のほうでは、日本代表というからどんなに大きな動物が来るかと思ったら、小さなキツネだったので、それで「キッポ」と呼ばれたわけですね。先ほどのツブと比べたらキツネは大きいですけども、たしかにトラやライオンと比べたら小さいですね。

でも、その小さなキツネは、先ほどのツブの知恵と似てるんですけどもそれを活かしたり、巣穴を掘る、もう一つは化かす力、自分の得意な化かす力に磨きをかけて、きっと外国に臨んでいったのではないかなと思います。日本の動物たちを救ったキッポ、とてもかっこいいですね。

この話は珍しい話だなと思います。どんな点が珍しいかというと、まず話の場面が外国であること、そして、キツネの完全勝利であること、そして最後にありましたけども、キツネは、まだ日本になかった稲の種を持ち帰ってくれたこと、そのおかげで、日本で稲作ができるようになった。だから、稲作の神さまとして今でもキツネが祀られているというのはうなずけますよね。

面白いなあとと思うのは、先ほどのツブもそうですけれども、ツブっていうのは今でも無農薬の田んぼなんかにはいるそうなんですけれども、水をきれいにしてくれる働きをするそうです。人間の暮らしと稲作がキツネの話によって伝えられているっていうのはとてもおもしろいことだなと思います。

今、聞いていただいたお話、二つは、動物同士のお話でした。今度は、人とキツネの関わりを物語った話を聞いていただきます。『キツネのあん餅屋』、柴田民雄さんが語ります。

『キツネのあん餅屋』

語り 柴田 民雄(みやぎ民話の会)

キツネのあん餅屋。

長者^{ちやうじゃ}ヶ原^{がはら}に、びゅーっと風が吹いて、すすきがぬめぬめとゆれる晩方に、ぽつらん、ぽつらん、ぽつらんと、きつね^びっ火^びがともる。

火^ひをつけてあそぶきつねは、貝沼^{かいぬま}のドロコ、大西^{おおにし}のザザブ、権現山^{ごんげんやま}のゴンスケ、ふうらいぼうのアワテンボウ、みんないたずらずきの子ぎつねだ。

あるとき、権現山^{ごんげんやま}のゴンスケが、ゆうらり、ゆうらり、しっぽをたてて山から合図しおったわ。

来^こうや、来^こうや。

こんやは、竹^{たけ}の花^{はな}の甚兵衛^{じんべえ}さんが嫁とりだ。

ほら、見^みい。ひげのさきまでどろをつけて、貝沼^{かいぬま}のドロコがはしっていくぞ。

ススキの波を分けてやってくるのは、ザザブのやつだ。

竹の花のチョンコめは、白い花をみみにかざって、おちょぼ口してとんでいく。

あれ、嫁さまだば、ごっつおういっぺえあるべなあ。

さかなに、かまぼこに、あぶらあげも。

たまらん、たまらん。

四ひきは、よだれたらしてでんぐりかえった。

いくべ、いくべ。

なじょして、いくべ。

嫁さまにばけて、

ごっつおうをよこどりすべえ。

そうすべえ、そうすべえ。

そこへ、あわててかけつけたのが、ふうらいぼうのアワテンボウだったのさ。

まぜてくれ。

わたしも、ごっつおう よばれたい。

アワテンボウは、みんなにたのんだのに、ゴンスケはうう、うう、ううっとうなるし、
ドロコはどろをぶつけるし、ザザブはうしろ足でけんぐるし、なんぼいってもまぜてくれない。

アワテンボウが、嫁さまにばけてみろ。

しっぽだしたり、みみだしたり、

たちまち、ばけのかわがはがされっぺ。

こんどばかりは、

まぜらんねえ。まぜらんねえ。

いうがはやいか、四ひきはすっとなでいってしまった。

さて、甚兵衛さんの家に向かった四ひき。チョンコがおしろいをはたいて、嫁さまになると、ゴンスケは、ちろちろと火をたててちょうちんもちをつとめる。ザザブのやつは、くろもんつきをめかしこんでおどっつあまにばけ、ドロコは、どろをおとしておがっつあまにばけた。こうして、ずしずしと甚兵衛さんの家へ乗り込んでいった。

甚兵衛さんの家では、おおぜいしてまっていた。

さあさあ、さあさあ。

めでた、めでたのわかまつさまよ。

おお、嫁さま、ござんなったぞ。

こちらへ、こちらへ。

一の座敷をとおり、二の座敷をとおり、三の座敷の、その奥の小さい部屋にとおされた。

お客があつまるまで、

ここで、まっててください。

いまに、ごっつおうもでるから。

チョンコ、ザザブ、ゴンスケ、ドロコ、ちーんとすわって、いまか、いまかと、ごっつおうをまっていた。すると、部屋のすみからぷすぷすとけむりがあがった。なんだか、唐がらしの^{とん}においがする。

なんだ、なんだ。

こりゃ、なんだ。

四ひきは、しっぽをだしてにげようとしたが、板戸^{いたど}には、がつんとつめ^{つめ}がかかってあった。

その夜、まるい月が空にきえるころ、甚兵衛さんの家のまえに、ごっつおうがならんだ。

アワテンボウやあ。

ここへ来て食いな。

ようおしえてくれたなや。

おめえのおかげで、いたずらぎつねをやっつけた。

めでたやなあ、めでたやなあ。

だが、朝になっても、ごっつおうはそのまま。アワテンボウはすがたをみせなかった。いじわるされたのがくやしくて、さきまわりして、仲間のくわだてを甚兵衛さんにつげた。だが、ころすとはおもわなかった。

にんげんさまのすることは、

なんとおそろしか。おそろしか。

アワテンボウは、まい夜^よさ、まい夜^よさ、ないた。その声をきくと、甚兵衛さんとわかい嫁さまはたまらなくなった。

きつねよ、きつねよ わるかった

く^くよう^{よう}つか^{つか}
供養の塚をたてるから

かんべんしてけろ。

ふたりは石をつんで、供養の塚をたてた。

それからまもなくして、きつね塚^{つか}のそばにあん餅屋^{もちや}がぽつりとたった。あねさんかぶりのわかい女が、そりゃうまいあん餅をつくった。あんまりうまいので、すすきをわけわけ、あっちからもこっちからも、おおぜいの人がかいにやってきた。

ほれ、ひとつは

そこのきつね塚^{つか}にそなえてや。

あねさんはこういって、かならずひとつ、おまけしてくれた。ときどき、その手にもじゃっと毛^けがはえていたり、あねさんかぶりのかげでびくんとみみがうごいたりしていたそうな。

ちょうじゃがはら

長者ヶ原^{はら}は、きょうも、ぴゅーっとな風がふいている。あん餅屋はいつのまにかなくなったが、きつね塚^{つか}だけは、いまものこっている。ついこのあいだまでここにあったおはなし。

こーんでおしまい、こんこん。（拍手）

〔再話 小野和子／みやぎ民話の会叢書第二集『みやぎのおさないひとたちのためのむかしばなし』より〕

子ギツネたちがちょっと本気のいたずらをするために、アワテンボウを仲間はずれにしてしまったんですね。そうしたら、ギツネ同士の裏切りという結果をもたらしてしまいました。

告げ口したのはアワテンボウです。甚兵衛さんは、「おかげでいたずらギツネをやっつけた」と何気なしに言いました。この場合の「やっつける」っていうとき、人間は「ギツネを殺す」っていうことを意味したのですけれども、ギツネにしては「ちょっとこらしめる」くらいのつもりだったのではないかなと思います。立場の違いがこんなにも結果が違うということがあるんだなと思います。仲間を殺されてしまったギツネ・アワテンボウは「人間さまはおそろしかあ」といって「仲間をかえしてくれ一、げーん、げーん」と泣きます。でも、その思いを受け止めた甚兵衛さんとお嫁さんが供養のギツネ塚をたててくれました。そして、アワテンボウはあん餅屋になって一生仲間を供養した、ここで少し救われたように思います。

もう一つ、人とキツネの昔話を聞いてください。『法印さまとキツネ』小野津仔さんが語ります。

『法印さまとキツネ』

語り 小野津仔（みやぎ民話の会）

むがあす、あったづもなあ。法印さま、いだったど。法印さまつうのは、法螺貝ほらがい背中さ背負って、村のあつこつをまわって拝みながら歩く人だったど。

ある日、うらあらかな日だったづも。法印さま歩いていったど。したっけなあ、気持ちよさそうに、キツネ寝でだったど。

〈ああ、キツネ気持つよさそうに寝でるな。ようし、ちょっといたずらっこしてみっかな〉
って、法印さま法螺貝下ろして、そのキツネの耳元で、

ボホーン

って大っきな音出したんだど。したっけ、キツネ、たまあげでがらに、くらんと起きで、すかっと法印さまの顔にらんで、山さ逃げでったったんだど。

「ああ、たまげで逃げでったな。尻丸けっつこぐして逃げでったじゃ」
ほして、法印さま、ままだ歩きはじめだど。

したっけ、なんとにわかに、そうだ、日暮れみでえに暗くなってきたど。

〈あやあ、こんなに早く日暮れんだべが〉

と思ってまず歩いてだれば、ほのうづに、どんどん、どんどん暗くなってくるもの、

「あやあ、これでわがねえ」

って、そばさ大っきな木あったど。

「ああ、これ、ずいぶん大っきな木だなや。クルミの木だなあこれ」

って言って、法印さま、歩き疲れてだのもあって、その木の根元さ腰下ろしたど。そのうち、うとうとどしてきたっけ、なんぴごとたったんだが、ガヤガヤ、ガヤガヤっていう音、聞けできたんだど。ふうって目覚ました法印さま、遠くの方に、なんだが提灯の明かりっこみでえなの見えてきたど。

〈ありゃあ、なんだべなあ〉

と思って見てだっけ、そのガヤガヤがだんだんこっつのほうさ近づいてくるんだど。よく見だれば、なんだが葬式の列みでだった。

〈あやあ、だれか死んですまって これ、葬式の列だべがなあ〉

と思ってるうちに、その列どんどんこっつさ寄ってくるもの、

〈あややあ、これではわがね。どごさも行がれべしなあ〉

って法印さま、その大っきな木さ登ったど。したっけ、その列、どんどん近づいできて、なんと木の下さ、穴掘り始まったど。

〈あややあ、ここの下さ埋めるんだべがあ〉

と思って、法印さま、木さまだ登ってぎつつり掴まったづが、大っきな穴掘ってだんだづ、その下がんぼこさ棺箱埋めで、拝んでは、おいおいと泣きながら帰ってってすまったど。

〈あやあ、なんじょにすっぺえ〉

と思って、法印さま木さぎつつり掴まって、まなぐつぶってだど。

ほうしたっけ、ほの埋めたどこの穴ん中の方から、

バリバリッ、バリバリッ

っていう音すんだと。

〈あやあ、なんだべ〉

と思っているうちに、

バリバリバリバリバリーン

って大きな音すて、^{がんばこ}棺箱の中から^{しびと}死人が額さ白い紙っこ貼った死人、死んだ人なあ、出はってき
たんだと。ひえーおっかねえと思ってだっけ、

ほういいーん いだがあー

ほういいーん いだがあー

って言うんだと。法印さま、おっかなくてまだ、一枝登った木さ登ったと。したっけ、

どごまでいったって わがんねぞおー

ほういいーん いだがあー

って言うがら、まゝだ法印さま、おっかねくておっかねくて、まだの一枝登ったっけ、クルミの木
つうものはもろいんだそうだな。法印さま、そのつかまってだ枝がぼりっ、ぼりんと折れでしまっ
て、どすーんって、法印さま、川ん中さ落ちてすまっただと。

〈はあぁあややや〉

と思って、法印さま、目開けたら、なんと昼日中だったと。

さっきいたずらしたキツネに仕返しされですまっただというはなしですが。

どんとはれ（拍手）

〔話 引地田路子さん(昭和十五年生)／記録 島津信子〕

これは、人がキツネに負けてしまう話ですよ。知恵も力もあると思っている人間、ここでは法印さまで
すが、ちょっと愚かだと思っているからなのか、動物のキツネにちょっといたずらをしてしまった。キツネ
っていうのは他の動物と違って、なにか人にやられたりするとすぐ逃げないで、立ち止まったり振り返った
りしながらどんな奴がいたずらしたのかちゃんと確認するんだそうです。それだけ知恵が回るのでしょうか。
そして、策を練って、相手を化かして仕返しをするんですね。

「ほういいーん、いたかー」と迫られた法印さまは、どれほどこわかったなあと思います。実はこの話もい
ろんなところで聞かせていただくんですけども、やっぱり「小さい頃に聞いた時ね、うんとこわかったんだ
よお」と何人もの方がおっしゃっていました。

では、第一部の最後の話になります。『^{にせほんぞん}偽本尊』の話です。山田和郎さんが語ります。

^{にせほんぞん}
『偽本尊』

語り 山田 和郎（みやぎ民話の会）

むがぁし、あるどごに、キツネ、いたずらばりしておって、困ってらどごあって、それで罠^{わな}かけ
でて、うまぁぐそのキツネひっかったんだと。

殺してから罠の糸解いたら良^いかったべが、そのまま解いてすまっただと、キツネ、手^てえ噛んで逃

げてしまったんだと。

近所の人だちあ、

「いたずらキツネつかまえだぞ」

って、集まってきたんだと。キツネ、逃げっぺと思ったっけ、人がいっぱい来るんで、逃げらんねぐなって、あっちゃ飛んだりこっちゃ飛んだりして、とうとうお寺さ入り込んだと。

本堂さ入り込んで、ほして、ご本尊さまに並んで、本尊さまのように化けたんだと。追っかけていった人達、

「あれえ、本尊さま二ついる。今まで一つだったのにどうしたんだべ。キツネが化けたんだべ。どっちが本尊さまだか、どっちがキツネだかわがんねぐなってしまったや。なじょすっぺ」

って、いろいろ知恵しぼっていたら、一人の気はしの回る男、

「いい、いい。おれ、なじょんすっから」

って、油揚げ煮てほやほやって湯気立てて、そいづ皿さいっぺえ盛って、本尊さまのどころに行つて上げたんだと。

本物の本尊さまは動かねがったけど、化けでだ本尊さま、鼻、ぴくぴくっ、ぴくぴくっと動がしたんだと。

そんで、戸おぎっちり閉めて、キツネ退治されでしまったんだと。

えんつこもんつこ さけた (拍手)

〔話 永浦誠喜さん(明治四十二年生)／みやぎ民話の会叢書第十集『青島屋敷老翁夜話』より〕

先ほどの話は、人がキツネにやられたわけですけども、この話は、キツネが人にやられた話とっていいのではないのでしょうか。本物のご本尊さまと見分けがつかないくらいに化ける力を持ったキツネでも、大好物のほかほかの油揚げにはかなわなかったようですね。キツネの一番の好物は何かっていうと、ネズミの天ぷら、そして油揚げだそうです。このことを見抜いた人間の知恵の勝ちとなりました。

さて、ここまで、5つの昔話を聞いていただきました。

まず、「動物同士の昔話」の中では、キツネは化け比べをしたり、知恵比べをしたり、力比べをするなど動物同士で勝負をする話がありますが、どちらかというとちょっとずる賢いとか悪知恵をはたらかせるとかのイメージが強い話が多いかと思います。

キツネの「仲間同士の話」の中で、仲間はずれはキツネの世界にもあるのだなと感じました。

また、「人とキツネの昔話」で、わたしたちがどこに採訪に行っても聞かせてもらえたのは、人がキツネに化かされて、持っていたお包みのご馳走やら魚やらを取られてしまうという話です。キツネは、木の葉を頭に載せて三回まわるとどんなものに化けられるっていうことも聞いたことがあります。人に化けて、または人を化かして、そこには食べ物が絡んでくるんだなということ、なんとか食べ物をせしめようとするんですけど、それだけにはかぎらない話もあります。いたずらや悪さをした人間には仕返しをしますけれども、中にはキツネに親切にした人に対して、ご馳走したり、お金をくれたり恩返しをする話も聞いたことがあります。

どの話にしてもキツネとはいえ、人間社会に通じるものがあるのかなと感じた次第です。

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

5. みなさんと感想や意見の交換 その一

進行 小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

小田嶋—ありがとうございます。みなさんどうでしたか？ 五つのお話聞いてもらいましたけれども、みんなキツネが出てきましたよね。五つの話とも、キツネと誰かが争ったり、競争したり、やっつけたり、やっつけられたりする話でしたけれども、ほんとにさまざまな顔をしたキツネたちがたくさんのお話の中に登場するんですよね。

こうしたお話を今聞かれて、みなさんいかがでしたでしょうか？ どんなふうに感じられましたか？ あるいは、どんな話が好きですか？ なんか嫌だなあってことはなかったでしょうか？ ここはどうなんだろう？ もっとここを知りたい！ ということなどがありましたら、どんなことからでもかまいませんので、自由に闊達^{かつたつほんぼう}奔放に、どなたからでもよろしいので、なにかご意見を出していただければと思いますが、いかがでしょうか？

A (男性) —ちょっと素朴に疑問に思ったのが、キツネは先ほどもおっしゃられたように稲をもたらしたそういう神さまの使いか、そういうお稲荷さんとかに称えられているのに、一方では、こんな悪者にされてるって、どうしてこう両極端なのかなあって疑問に思いました。

小田嶋—確かにそうですよね。神さまのお使いでもあるんだけれども、人間にやられて大変なめにあったりもする。まあ、人間もやられたりもするんですけれども。ほんとに両極端というんでもないですけども、いい扱い、悪い扱いいろいろあるのはなぜなのかということなんですけど…。とっても難しい質問なんですけど、それについてこうなんじゃないかとか、あるいはもっと何かそれに関して…。

B (女性) —ちょっとうまく言えるか分かんないんですけど、なんかその女に厳しくて男にすごい寛大だっということが、すごい気になって。でも今キツネの話を聞いてても、それが男のキツネなのか女のキツネなのかはあんまり問題になってなくて。でもたまに、「この女ギツネが」^めみたいな言い方もするじゃないですか。だから、まあそういう感じもなのかなと思いつつも、なにか女でも男でもどちらでもない変身するみたいな存在？ あとはその感情の類で言うと、人間の中で言うと、なんか嫉妬^めみたいな、嫉妬の感情がなにかキツネに背負わせているものとして、人間があるような感じがちょっとしたりして。

さっきの稲の話になったんですけど、なんていうかな嫉妬の感情で言うと、「あれいいなあ」って思う、そこから交渉するっていうような、すごい交渉力があるみたいなところも、元を辿れば、「あれいいなあ」の嫉妬ではないけど、何かがいいなと思うような感じだったりして、そんなことを思うと、割と人間の中でも、「私、百%女です」とか「私、百%男です」ってみたいな人はいなくて、そのどちらでも少しずつ持っているみたいなところがあってみたい、なにか普通の概念を許さないようなそんな存在なのかなあって思っちゃったりとかして。その嫉妬というのがなんか分からないけど、人間独特の感情っていうか、人間社会独特の感情である気もしてみたりしました。だから、その交渉がうまいとかいうのも、なにかすごくひっかかるんですけど…。

なんかその変身するという意味でいうと、そのキツネの話を今聞いてて、なんだかすごくとんでる話に聞こえるかもしれないんですけど、最近テレビでマツコデラックスっていう人ね、私、彼女のことをすごいキツネみたいだなってずっと思ってたんですよ。すごく、交渉がうまいし化けてますよね、彼女は。そのトランスジェンダーと言えるかもしれないけども、もっと根深い男には寛大だけど女には

めっちゃ厳しいとか、なんか分かんないんですけど、そういうふうにいるいろいろ考えがとびました。

小田嶋—ありがとうございました。たくさんの意見を出していただいて、全部捉えきれるか分らないですけども…。キツネの男、女の問題は、確かに男女の違いが分からない場合もありますけども、女のキツネ、男のキツネとして、個別の名前が残っているような有名なキツネみたいのも伝えられたりはしています。それから、男とか女とか、人間とかキツネとかそういう区別を許さない。そこを行ったり来たりすることが、なにかキツネに託されたことなんでないかということなんでしょか？ それすごく大事な指摘なんじゃないかと思います。あと妬みとか嫉妬ですか。つまり、人間の中の特異な感情を、キツネという物語の世界のなにかに託しているんじゃないかというか、それを託すことでお話の中でなにかを展開させているんじゃないかという指摘だったかと思うんですけども、とても大事な指摘をしていただきました。

あの、そのことについてでもいいんですが、そのほかになにか、ここが分かんないとか、ここがすごくおもしろかったとかなんでもいいので出していただけたらと思います。

C (男性) —七十九才の爺ですが、二、三才になる孫がですがね、「子ギツネコンコン 森の中森の中…緑のかんざし つげの櫛」かな。その間にまだもう少しあんだけども教えてくれないんですよ。私が考えてきたキツネのことですが、このキツネっていうのは、今まとめられた最後んところは、感情移入の問題だと思うんだけど、そういう自由さがあった。なぜか？ それは、キツネっていうのはイヌ科のケモノなんですね。私たちの周りには、とてもたくさん居たんじゃないか。それで、イヌのかわりにキツネが愛玩動物になった可能性があんじゃないかと思うんですね。それで、民話を作っていらっしゃる方が、想像力を働かせてそのキツネたちと会話をなさっていたと、想像しながらね。それで、さっき言った感情移入とか嫉妬とか願いとかねそういうものを託していたんじゃないかと、私は思ってきました。国語辞典をひくと、「キツネ」ってひくと次のような形で出てきます。キツネうどん、キツネ^{けん}拳、キツネ^{ごうし}格子、キツネつき、キツネの嫁入り、キツネ火。これみんな人間に関わることですよ、食べ物に関わること。でえさつきもちちょっと出ましたが、稲荷って出てきますが、この稲荷っていうのは、「うかんむりみこと」という神さまの、神の代理人を務めたのがキツネであると。これは、やっぱり民俗学からするなんか言い伝えですか。また想像力を働かせて、物語を作る、作って楽しむ、ちゃかしたりしたんじゃないかと思うんですがね。いろんなこの役割をですね、この身近なキツネさんに背負わせたというふうに私は感じました。

小田嶋—ありがとうございます。今も大切なご指摘をいただいたのかなと思うんですが、キツネが、ほんとにイヌとは違う野生動物なんだけれども身近な存在であった。なぜなのかは分からないけれども、イヌとは違う人間には飼われるものではない野生動物なんだけれども、でも身近なものとして両面を持っているものだっていうキツネの存在。先ほどの方もキツネの相反する両面みたいなものが一緒にあるっていうことを言われてたんじゃないかなと思うんですが。やっぱりそういうなにか懐が深すぎて、とてもつかみきれないような、今おっしゃった親しみを持ってキツネを可愛いなと思うのと、だまされてキツネにつかれたら恐ろしいもの、ちょっと得体の知れないものという面も同じキツネだっていう。そういう両面を、いろんな両面を持っているものなのかなあっていうことが、今、出てきたんじゃないのかなあと思います。

D (女性) —東京から来ました。東京でも結構キツネの話ってあって、ちょっと調べてたんですね、民話じゃないんですけどね。そんなときにいろんなことを思ったんですけども、キツネとタヌキってよくペアで、うどんとそばもそうですけども、必ずペアで語られますよね。ところが、私はタヌキの民話はそれほど詳しくないんですけどもね、キツネのような役回りを同じペアで語られるタヌキの方に、こういう人間と知恵を比べあうようなそういう話はあまりないんじゃないかなってちょっと想像するんですよ。どっか間抜けな愛らしい存在として意識されますよね。

例えば、東京には王子稲荷というとても有名なお稲荷さんがあるんですけども、そこで必ず年末になると人間がキツネになって行列するんですけども、その場所は、崖があって、キツネの棲んでた穴だというのが、今もそこに残っていて、そこに社があるんですね、東京で。想像するに、実際にキツネは居たんじゃないか。あるいは、そういう崖を見ると、キツネを想像するんじゃないかと思うんですね。そうすると、私がいろいろ調べたときに感じたのは、キツネという生き物の習性というのを、人間はとてもよく観察したし、またそのような身近なところに居たし、彼らの中からさまざまなことを想像して、人間の世界の物語の中に膨らませていったなということを強く感じたんですね。

そういう物語が膨らんでいくと、今度、実際のキツネを見ると、例えばですね、これは向島の方の神社の話聞いたときは、埼玉の方からね、自分のところにキツネが出て生け捕りにしたんだけど、とても恐ろしいから納めに参りましたって、生きたキツネを持ってきたんですね。それで、その神社としても困ったんですけども、丁度昔のキツネ穴みたいなのがあって、そこで飼ったんですね。そのように、キツネを、じゃあ簡単に毛皮をはがしちゃいけないっていうか、そういうような、なにか物語と実際のキツネで長い危機がある中で、虚実の境がどんどん取れていくようなことが起きたんだなあって非常に感じたんですよ。その虚実をなくするような存在性というのが、やっぱりキツネの特性ではないかと思っています。

ちょっと話がとんで申し訳ないんですが、家にネズミを飼っているんですね。天井じゃなくて、砂ネズミっていうのを飼ってるんですけど、それを見ていて思うのは、ネズミも非常に民話に出てきますよね、絵にも描かれる。そうするとね、もう飼ってるだけで自分の中の想像力がものすごく刺激されるんですね。お話がどんどん湧いてくる感じなんです。そのくらい、ネズミの、ただケージで飼ってて、ちょっと畳の部屋に放すくらいなんですけど、ものすごくはっきりとしたなにか特性を持ってるんですね。それが、もうお話を作ってくれて言ってるみたいな存在に見えるくらいの感じで。だから、動物の中にもそのような特性を持ったのと、なんとなく人間と離れたところでぼんやりと生きてると言っちゃ失礼ですけど、あまり人間に関心がない生き物と居て、キツネとかネズミというのは、そういう意味では民話によく出てくるし代表だなあと、そういう動物なんだろと、実際に自分も飼っていてね、強く感じています。

小田嶋 —ありがとうございます。とてもいいことをおっしゃっていただいて。実際のキツネ、それからお話の中のキツネ、その虚と実がある。そこを行ったり来たりしているうちに両方をなにか展開させていくっていう、そういう力を持った存在なんじゃないかなということなんです。それはネズミでもそうだと。実は、先ほど出てきた崖というのがありましたけど、キツネがよく出る場所っていろいろあるんですけど、例えば割山わりやまっていうんですが、やっぱり崖のところ、そこで土塊を落として、それがきのこに見えたとかいう話もあるので、やっぱり現実のキツネとお話の中のキツネは、重なり合いながらも同じではないんだけど両方で影響しあってるような、そんなところはあるのかもしれないね。

E (男性) —ちょっとぼんやりしたイメージをもとに話すんで、もう結論出たような話の組み立てはできないかもしれないんですけども、今の話の方を聞いていてやっぱりタヌキっていう存在はすごい。キツネの話が出てくると、どうしてもタヌキが浮かんでしまうというのは、自分は多摩のニュータウンの出身なんですけれど、やっぱり今でも実家の方に帰るとタヌキが出てくるんですよ。終電とか過ぎたあとに、夜遅くに一人でぼつりと歩いていると、タヌキが出てくるんですけど、例えばアニメにあった「ぼんぽこ」みたいな感じで、都市に追いやられて、まさに身を潜めてどンドン姿を消していつているようなのが、そのストーリーを置いておいて、タヌキを見たときに、丸っこい背中と、ずんどうのなんとも言えないような風情を見ると、やっぱりそんなふうに思ってしまうというような、人間くささがやっぱりあるんです、タヌキっていうのは。さっき、神さまの話も出ましたけど、キツネはもちろんお稲荷さまだったりとか、先に触れられていた小野さんがさっき語られていたクマだったりオオカミだったりっていう人間と距離を置いて、ときどきこちらも距離を置いているそういう動物っていうのは、やっぱり神さまになっている。オオカミの信仰だったりとか、クマも神さまになっている。タヌキってやっぱり商売の神さまみたいな、やっぱりひとつ自分たちに近い存在として居るっていう。そこには、なんか動物っていう人間にあったときに感じる緊張感だったりとか、その一番最初の皮膚感覚みたいなものがなんか反映されているような感じが、どうも個人的にはしています。カチカチ山もそうですけど、タヌキってすごく残念なめにあったりとか、だまされてしまったりとか、やっぱりすごい人間の一番こう人間らしさみたいなものが抽出されているというか、表出されているような感じで。でもキツネっていうのはその中で、ものすごい緊張感というか、ときにそっちに裏返ったりっていう、人を化かすっていうのと一緒にそのどっちに化けるか分からないっていう意味の、その不安定さみたいなのをキツネは持っているように思います。自分はキツネを実際に山で見たことはないんですけど、水木しげるさんの漫画かなんかで、少年時代に遠くでキツネが鳴いた声を聞いて、すごく恐ろしかったというようなことが描かれていて。オオカミもやっぱり遠吠え、オオカミはイヌみたいにほえないってお話聞いたことがあるんですけど、遠吠えがやっぱりそのような緊張感だったり夜の夜中に、人々に伝えていたような気がして、そこがまたひとつのキツネとタヌキの違いなのかなとお話を聞いていて、ちょっとそう思いました。

小田嶋—ありがとうございます。我々の先祖たちが暮らしてきた生活の中で、動物たちから受ける、我々のえもいわれない感覚みたいなものが、おそらく根っこにあるんじゃないかっていうことですよ。私たちの時代になってしまうと、ちょっと分かりきれないことが多分あるんでしょうけども、なるべくそういうものを考えてみたいと思いますね。

F (男性) —私は、県北の栗原の築館というところに住んでるんですけども、周りはまだタヌキとかキツネがいっぱい居るんです。大体対比的に数としては、タヌキが十でキツネが一ぐらいかなあ。秋口になると、家に帰るときに道路をよくタヌキが横切るんで、四十キロ以上はとてもしゃべれない。タヌキは遅いんですよね、ノロノロノロノロと出てくるんで、ほんとにもうすぐに急ブレーキをかけないとひいちゃう。ただ、キツネは速いんですよ。ヒョーンヒョーンヒョーンととんでいって、もうほれほれするくらい身のこなし。なんか、タヌキとキツネっていうのは、そもそも出してる生命のエネルギーとかオーラが全く違うなっていうことを感じています。

私自身が、キツネの思い出話、小さい頃にあるんですけど。小学校の頃、妹が突然具合悪くなりまして、茶の間でみんな心配してるんですね。両親とかお祖母ちゃんとか居て、「ううん」って妹がうなっている。「どうしたんだろう、どうしたんだろう」ということで、すごく真面目なお祖母ちゃんがぼつりー

言。「ああ、こいつキツネにつがれたなあ」って、「えええっ」って思っ。私の家は、実はお寺なんですけど、少なくともお寺っていうのは結界があるんじゃないかと。そんな悪いものは入ってこないんじゃないかって、そんな子ども心にあったんですけど、「わああ、キツネってこんなところにも入ってくるんだ。容赦なく入ってくるんだ」って。「しかも、俺じゃなくて妹の方に入るんだなあ」って。やっぱりさっき言った女性の方に厳しいっていうのね、さっき思い出したんですけども。要するに、なんか私にとってキツネって怖いっていうイメージがやっぱりありまして。でも昔話の中で、なんかもう対等に、もしくはそれ以下になってるってことは、やっぱり人間の中ですごく怖いっていう部分があるので、いやいやそんなに恐るるにたるんじゃないんだよっていうそういう思い。そういうことも伝えたくて、両極端のキツネのイメージっていうのが出てきたのかなあっていうふうに感じました。まあ、ちなみに家の近くに棲んでるキツネはちょっと弱くて、家で飼っているイヌを放し飼いにしてるんですけど、いつもケンカで負けています。はい以上です。

小田嶋—ありがとうございます。

小野—あの、キツネの鳴き声ご存知ですか？イヌならワン、ネコならニャン、ウマならヒヒインですが、キツネなんて鳴くんですか？

会場—ケーンケン。ケンケン。

小野—ケンケン？ケーンケン？あの民話を語る方々は、キツネの鳴き声をグゥエーン グゥエーンって、とても悲しい声で鳴くそうなんです。グゥエーン グゥエーンって、これは付け足しですけど…

c

小田嶋—次に、いよいよお待ちかねの、後半のキツネたちが手ぐすね引いて待っておりますので、「さまざまなキツネたちの姿その二」にいきたいと思います。語っていただくのは、やはりみやぎ民話の会の語りグループの仲間たちです。進行は、プロジェクトチームの中の山田裕子さんにお願いします。よろしくお願いします。

記録 加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

6. さまざまなキツネたちの姿 その二

進行 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

それでは後半をはじめます。最初は『キツネと小太郎』というお話を、みやぎ民話の会の目黒とみ子さんが語ります。始める前に、目黒とみ子さんの紹介を少しさせていただきます。目黒とみ子さんは、原発事故の前まで、福島県双葉郡双葉町で暮らしていました。それが原発事故に遭い、八回もの避難を余儀なくされました。何度目かの避難先で声を掛けてくださった方がいて、福井県の永平寺町のお寺に十数人で避難したそうです。そこでとてもよくしていただいたので、避難していた人たちで何かお礼をしようということになったということです。近くに老人福祉センターがありましたので、そこで踊ったり歌ったりしてお礼をすることにしたそうです。ところが、目黒さんは、〈歌は得意でないし踊りもできない、どうしよう〉と思ったときに、双葉町の民話『キツネと小太郎』を思い出したということです。それで、お礼に『キツネと小太郎』を語ったということです。それでは、『キツネと小太郎』をどうぞお聞きください。

『キツネと小太郎』

語り 目黒 とみ子(みやぎ民話の会)

むかしむかし、太郎という若者がいました。太郎は狩りがとっても上手でした。

ある日、太郎は山へ狩りに出かけたのですが、あまりにも山奥へ入ってしまったので道に迷ってしまいました。太郎は、むかし、じいさまから、「山奥で道に迷ってしまったときには、沢の水の流れの方に歩いていくんだよ」と教えてもらっていたので、そのとおりにしました。

見たこともない山里に下りてきました。あたりはもう真っ暗です。目の前に、家が一軒ありました。

「こんばんは。こんばんは。道に迷ってしまいました。ひと晩泊めてください」

「それはそれはおこまりでしょう。どうぞお入りください」

中からきれいな娘が出てきました。娘の名前はキクでした。太郎はひと晩のつもりだったのですが、キクがあまりにも親切にするものだから、ひと晩がふた晩、ふた晩がみ晩、気がついたら三年にもなっていました。

三年の間に太郎とキクは結婚し、かわいい男の子が生まれました。男の子の名前は小太郎こたろうです。

小太郎もすくすく成長して、お父さんと一緒に狩りに出かけるようになりました。

ある日、小太郎の家に悪者が来て、お父さんを連れていきそうになりました。

「お父さんを連れていかないで。お願いだから」

小太郎は必死になってお願いをしましたが、

「うるせえ」

悪者はお父さんを連れていってしまいました。

お母さんと小太郎はお父さんが帰ってくるのを待っていましたが、お父さんは帰ってはきませんでした。

何年か過ぎて、小太郎もりっぱな若者になりました。ある日、小太郎が山へ狩りにいって戻ってくると、家の前に見たこともないキツネがいます。

小太郎は、鉄砲でキツネを撃とうとしました。

「小太郎」

母さんの声です。

「わたしは山に住むキツネだったのです。小太郎にわたしの本当の姿を見られたからには、わたしはここに住むことができません。わたしは山に帰ります。この水晶の玉は、わたしの宝物です。悩みごとがあるときは水晶の玉を耳に当てると、なんでも解決してくれますよ。だいじに持っていないさい」

キツネは水晶の玉を小太郎の前に置くと、寂しそうに山に帰っていきました。

その頃、町にあるお城では、殿さまがたいそうな悩みごとを抱えていました。ひとり娘のかわいいお姫さまが、重い病気にかかっていたのです。いくらいい薬を飲ませてもお祓いをして、お姫様の病気はよくなりませんでした。

「なにかいい方法はないものかのう」

「山里に小太郎という若者がいて、悩みごとはなんでも解決してくれるそうにございます」

「小太郎を連れてまいれ」

小太郎はお城に上がり、殿様の前に行きました。

「小太郎、わしは姫のことが心配でならぬ。いくらいい薬を飲ませてもお祓いをして、姫の病気はいっこうによくならないのじゃ。なにかいい方法はないものかのう」

小太郎は、水晶の玉に耳を当てました。

「小太郎」

母さんの声です。

「お姫さまの寝ている床下で、へびとカエルとナメクジがけんかをしているのです。そのけんかをするときの息が、お姫さまの体に害をしているのです。それらを追い払うと、お姫さまの病気はよくなりますよ」

小太郎は、母さんに教えてもらったとおり殿様に言いました。

家来が床下に行ってみると、へびとカエルとナメクジがけんかの真っ最中。家来が追い払うと、三匹は別々ばらばらに逃げていきました。

お姫さまの病気がよくなって、すっかり元気になったのを見て、殿様はたいそう喜びました。

「小太郎、わしはこんなにうれしいことはない。褒美をとらせたい」

「わたしは学問がしたいのです」

それを聞いた殿さまはすっかり感心して、お城で一番の先生を小太郎につけてくれました。学問ができるようになった小太郎は、お姫さまと結婚し、ふたりはいつまでも幸せに暮らしました。

そして、殿様が亡くなった後は小太郎が殿さまとなり、この領地をりっぱに治めたということでした。

〔話 目黒とみ子さん(昭和二十二年生)／記録 山田裕子〕

目黒さんの語る「キツネと小太郎」を、みなさんはとても喜んで聞いてくださったそうです。そして、「たったひとつ覚えていた双葉町の民話『キツネと小太郎』をこのときに語ったのが、わたしの民話との出会いです」と、目黒さんは話しています。

この話は、先ほど小野さんも話していましたが、「葛の葉」と似ているお話です。「葛の葉」は歌舞伎や映画でも広まって御存知の方もおられると思いますが、わたしたちも採訪の折りにしばしば聞くことができました。この話を語ってくださった方は必ずといっていいほど「この話は母から聞いたの。母は語るとき、泣

きながら語ってくれたけど、聞いているわたしたちもおいおい泣きながら聞いたんだよ。だからこの話、忘れられないの」と話しています。この話は、なぜこんなにもたくさんの人たち、殊に女の人たちが語る継いできたのでしょうか。

では、次のお話に入ります。「医者先生とキツネ」、長須賀直子さんが語ります。

『医者先生とキツネ』

語り 長須賀 直子（みやぎ民話の会）

^{みやどこ}
宮床に二人、医者^いの先生がいたのね。

わたし、十三になったどぎ、がが（母）と死に別れたから、そのどぎは遠いほうの先生にかかっていたのね。十三といえは六年生ですべ。おれ、学校休んで、ががの薬もらいさ宮床まで行ったの。もらってきて飲ませたけんとも、ががは死んだんだものね。

そのどぎ、もっとこっちにもお医者さんがいたのね。その先生の話だけど…。

ある晩に、その先生^いのどこさ若^わえ男が来て、
「がが^あ（嬢）、お産すっから、すぐ来てけろ」
っていったんだと。

んで、医者先生、若^わえ男の馬さ乗さって行ったんだと。夜だったつうから、なんじょして連れていかれたもんだか、山さ行って、そすて、お産させて無事におぼこ（赤ん坊）産させたったづおん。そのあと、うどんご馳走^{ちっお}になったつもね。そすて、おれにおれもらって帰ってきたんだと。

そのあと、腹痛^{いた}くなって、ほれ、あげた（吐いた）んだと。うどんだと思ったの、ミミズだったんだと。ミミズをうどんに見せて食^きわせたんだね、キツネが。

そすて、おれ^{さつ}といえは、木の葉だったんだとやあ。

それから、その医者先生、あまり調子よくなくて長生きできねえで亡くなったものね。

「医者先生やあ、キツネにひかさって（化^かかされて）ミミズ食^かせらったぞ。錢^{ぜに}だどってもらったの木の葉だったぞ」

って聞かせらったのさ。

【話 伊藤ちどりさん(大正三年生)／『宮城県黒川郡 セツ森周辺の民話』(日本民話の会刊)より】

「えっ、なんだろう、この話」と思いませんでしたか。わたしの地元の黒川郡で語られた話なんです、聞いたときに、「なんだろう、この話」と思いました。で、「これは本当の話ですか」って訊ねたら、「本当の話だよ。その医者先生におれもかかったし、おれのがが（母）さまもお産のときに取り上げてもらったんだ」って言うんですよ。

今までの話は、「むかしむかし」で始まる話でしたが、これは実話として語られている『キツネ話』です。小野さんも先ほど話していましたが、このような実話として語られている『「キツネ話」』は数えきれないほどあります。今語った「キツネのお産」も、本当のお話、実話なんです。

この話、よく考えてみれば不思議なことがいくつかあります。

医者先生は、お産を助けにいきますよね。なんで「お産」なんでしょう。腹が痛いとか胸が苦しいとかいうんじゃない、「お産」なんです。それから、「お産」を助けにいくのが、お産婆さんではなくて、男のお医者さんです。わたしは4人姉弟ですが、みんなお産婆さんに取り上げてもらいました。ですから、わたしの生

まれた頃はお産婆さんがお産をさせてくれました。お医者さんがお産の場にいるようになったのはそんなに前のことではありません。それが、この話では、男のお医者さんです。なぜお産婆さんではなくて、男のお医者さんなのでしょう。

さて、次のお話は、そのお産婆さんが登場します。語りは倉林恵子さんです。

『キツネと産婆さん』

語り 倉林 恵子（みやぎ民話の会）

今でも、私は思い出すとぞっとするんだねえ。とっても恐^おっかねえことあったの。ちょうど、私が二人目の子どもを身籠^いっていた時、今から四十年も昔のことになるべかなあ。

この部落に腕のいい産婆さんが居^いたった。おどっちゃん（夫）が鉄砲撃ちで、キツネをうんと獲ったんだねえ。キツネの舌は癩^いの虫の薬と称して、高く売れるので、獲ったわ獲ったわ、縁側にずらっと並べて干すくれえ獲ったおんなあ。皮は皮で首巻にして、たいした金になるつつうんで、だらだら血のたれるようなのが、これまた、ずらっと干してあった。

ある雪の降る夕方、産婆さんが来て、

「どれ、腹の子診るから」

と、私の腹をなでたが、その手つきがモゾクソモゾクソしてて、いつもと違うなあと思ってたら、

「お不動さんまで一緒に行ってくれ」

と言うの。藪から棒だし、こんな雪降りの夕方でもあるし、

「おれ、ただの身体でねえから、悪いけんど行かれねえ」

と断ると、ぶすっとして帰ったんだねえ。それがどうも気になって胸騒ぎするんでね、産婆さんのあとを追いかけたの。

行ってみたれば、産婆さん、裏山の杉の木の下で両手を広げて、ぴょこたんぴょこたん跳ねてたのしゃ。目を吊り上げて、口を大きく開いて、踊ってるの。

「あれえー」

と思って見ていたら、大きいキツネが杉の木の陰から、ぽんぽーん、ぽんぽーんと跳ねて行くんだっけおん。

私はただ恐^おっかねくて恐^おっかねくて、逃げて帰ったの。

その晩のことだねえ。おどっちゃん（産婆さんの夫）が酔っ払って来て、

「^{がが}嬢、来ていんべか」

と訊ねたんだねえ。キツネのことを語ろうにも、なんぼにも言われなくてね、

「夕方来たが、先刻帰ったよ」

と、やっとそれだけ言ったの。

「あの奴、どこさ行きやがった」

と、酔ってたからね、おどっちゃん、ごっしゃいで帰ったのね。

しばらくして、またやって来たの。

「^{がが}嬢、どごさも居ねえ」

と、今度はしょんぼりしてたっけおん。それから大騒ぎになってね。部落の人や消防の人や、私の^{たいまつ}だんなも松明持って出ていった。

一晩中、探したが見つからなくてねえ。夜明けてきて明るくなると、雪の上に人の足跡が見えてね、その脇にキツネの足跡もあって、点々と山の方まで続いていたのしゃ。

それで、足跡を辿っていったら、大きな松の木があって、そこに産婆さんの着物がズタズタになって散らばってたっていうんだ。あたりの雪は血でまっ赤に染まって、食っ^{ちゃぶ}破られ、食っ^{ちゃぶ}破られていたんだねえ。そこから、人を引き摺った跡が、ダムのほうまでずーっとあったけど、産婆さんは見つからなかったの。おごいことしたのしゃ。

不思議だけど、私の腹の子は、どういうわけか水子さまになって流れてしまったんだねえ。それで、この年になってもあの時のことが忘れられないのしゃ。

〔話 高橋志ずへさん(明治四一年生)／小野和子「村話と女性」(『民話の手帖』1985)より〕

こわい話ですね。わたしの住んでいるところは、セツ森って山が七つあるんですが、そこで鉄砲撃ちをしている人に聞いたことがありました。「おれは、山でクマとかシカは獲るけれど、キツネだけは撃たない」って言うんです。「なぜですか」と、そのときに聞けばよかったなと思いますが、そのときは聞かないでしまいました。

この話は、小野和子さんが四十年前に、鬼首(元の玉造郡鳴子町鬼首)を歩いているときに聞いた話です。そして、このお産婆さんの話を、昨年、わたしも鬼首で聞きました。この話をしてくれた女の人は、「自分はこのお産婆さんに取り上げてもらったんだよ」と言って話をしてくれました。「お産婆さんはなんぼさがしても見つかながったけどね、春になって雪がとけてから、山菜とりにいった人が見つけたの。お産婆さん、なんでこんなとこにいるんだべっていう場所で見つかったんだよ。やっぱりキツネに馬鹿にされたんだべねえ」と話していました。四十年たって、この話が民話のように鬼首で語られているんですね。

次の話も本当の話なんですよ。語りは及川敏恵さんです。

『キツネにひかされたお婿さん』

語り 及川 敏恵(みやぎ民話の会)

お婿さんの人がいてね、ちょいちょい実家さ帰ってお酒を飲んで帰るんだったね。

あるとき、夜おそく、やっぱりお酒を飲んで帰る途中、どういうわけか川崖^{たけ}の高えところに行つて、そこからまくれて死んだんですと。キツネにひかされたってね。ふつうなら行く処でねえんです。

おかしのお婿さんてものは、ほんとうの下衆^{げす}扱いでね。下衆扱いってことは、「これは他所^{よそ}から来たものですよ」ってことで、「あんだは婿だから、いろいろ仕事をしなくてはわかんねえ。あんだは他人だよ」ってところがあつたんですが。別扱いだったね。

だから亡くなくても、石仏になっても、墓でもなんでも別扱いでがした。小さくすまっこのほうさおいてね。

婿に来るってことは「働きにくる」ってことでひどいことがあつた。嫁さんもたいへんだつたが、婿は男なだけにたいへんだつたさ。籍も入れられねえことがよくあつた。牛馬^{うしうま}とおんなじだったね。

「おら家の婿は馬鹿だ」とか、「さっぱり働かね」とか、いろんなこと、姑さまだちゃ、うわさ話にしたね。かならず他所^{よそ}さ行つて語ったわけ。

〔話 尾形久蔵さん(大正一四年生)／記録 小野和子〕

お嫁さんの苦労話ってよく聞くんですけど、お婿さんの苦労話ってあまり聞くことはないですよ。でも、思い出してみると、「小糠三合あるならば婿入りするな」とか、「婿は死んでも石仏」と、お婿さんの立場のたいへんさがむかしから言われていました。わたしの身近にも地主だったという家にお婿さんがきて、それこそ牛馬のように働いていました。けれども、舅が亡くなったときに財産は全部男孫にやって、お婿さんは一銭ももらわなかったんです。そのお婿さんが黙って囲炉裏端に座ってお酒を飲んでいた姿を思い出します。このお話のお婿さんは、つらい毎日のなかで実家でお酒を飲むのが唯一の楽しみだったんでしょう。けれども、あるとき実家から帰ってくる途中で崖から落ちて死んでしまいます。もしかしたら、お婿さんは自分から跳び込んでしまったのかもしれませんが。けれども、「キツネにひかされた」と言っているんですね。そうやってキツネのせいにする事で、お婿さんにいった家の人たちも実家の人たちも誰も傷つかない、キツネはそのような役目も負わせられていたんです。

ほかにも「キツネのせいにする話」は、あるんですよ。角田市の鳩原で聞いた話です。

たいした金持ちの家があってね、そこに十二くらいの娘、女中に来たんだって。うんと厳しい家でね、よく働いてたんだけど、ある日、木小屋さ薪取りに行って、それっきり姿がなく見えなかったんだね。

三日ほどあとに、山の中で、着物も何もぼろぼろになって、ふらふらしてるところを見つけられたけど。

なんでもね、木小屋さ行ったら、その娘のおばさんっていう人がいてね、
「〇〇、ちょっと迎えに来たんだけど、あべ」
ってつれていかれたっていうんだね。

三日めに、山のあたりまで一人でおりてきていたんだけどね。大さわぎしたんだねえ。

〔角田市平貫の採訪のときに聞いた話／記録 小野和子〕

もうひとつ「キツネのせいにするはなし」にこんな話があります。もう30年前になりますが、塩竈を採訪したときに、老人福祉センターにお風呂に入りに来ていたおばあちゃんに聞いたお話です。

若いとぎにね、東京のほうの川崎の工場に臨時に雇われていったの。金物工場で、掃除をしたり、金物をぴかぴかに磨いたりしていたの。朝7時に寮を出て、電車に乗って駅に降りると工場はすぐなんだっちゃ。

あるとき、いつものように電車に乗って工場に行ったら、門がないんだよ。塀がさだけあってね、工場のあったとごは草ぼうぼうになってんだ。

〈おがっついなあ〉

と思って、駅まで戻って、また行ったら。そしたら同じなの。

ほんで、仕方なく寮に帰ったのね。もう昼近くになってたよ。寮のおばちゃんに、
「なんだ、なしてこんなに早く帰ってきたのや」
って言われて、これこれこういうわけで工場がなかったと話したの。そしたら、
「弁当のおかず、なに持っていった」

と言うから、

「天ぷら持っていった」

と言ったのよ。

「ああ、ほれ、キツネがいたんだな。あんた天ぷら持ってたから、キツネにだまされたんだよ」
つうわけさ。

それから昼ご飯食って、また工場に行ってみたの。そしたら、ちゃんと門があったのよ。工場の
人に、

「なんで休んだ」

と聞かれたから、

「今朝駅で降りて工場に行ったら、門がはっぱりなくて塀がさだけあったんだよ」

と言ったの。そしたら、

「ほんなことあるはずねえ」

って、うんと怒られたの。

工場の人たちで、いつも、

工場 焼けろ

事務所 つぶれろ

社長 コレラで死ねばいい

って言って働いてたの。

〔話 伊藤シズエさん(大正元年生まれ)／記録 山田 裕子〕

小田嶋—ありがとうございました。前半のキツネ話とは、ほんとうにおもむきの違うキツネ話でしたよね。
キツネと人が争うのではなくて、結ばれたり助けあったりした話二つと、それから、ほんとうにあった
こととしての、実話としてのキツネ話二つでした。

キツネの世界と人の世界っていうのは、夫婦や親子として関わりあったり、助けをもとめてきたり、
それに応えたりしているみたいですね。でもすっかりおなじ世界に住むことはできないのかもしれない
ですね。

そして、実話としてのキツネ話っていうのは、物語のキツネ話とは、ほんとうにおもむきが違ったと
ころがありますよね。得体のしれないキツネの怪しさというか恐ろしさに、ちょっとぞっとしましたし、
一方で、人の中では明るみに出せないようなことを、キツネに背負わせて、なんとかわれわれは暮ら
してきたのかもしれない。

記録 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

7. みなさんと感想や意見の交換 その二

参加者の皆さん

小田嶋—以上のように、十話ほどのお話を聞いていただきましたけれども、みなさんはキツネたちをどんなふうに感じられましたでしょうか。あるいは、どんな存在として見えましたでしょうか。またどんなキツネが好きですか。あるいはいやでしょうか。それからどんなふうに関わり合いになりたいか。あるいは関わりあいになってるという方もいるかもしれませんが、なんでもいいので、前半と同じように、どんなことからでも、ご意見を表していただければなあと思いますが。

いかがでしょうか。

G (男性) —楽しい話、ありがとうございます。こんなに今日、キツネの話を一度に聞いて、「キツネってほんと、なんでもありだな」と思いました。キツネが人間の子を産むとか、逆は絶対できないとか、すごいなと思って。人間がキツネの子を産んだって話は知らないですけど、そういう意味で人間の限界を、つねに突きつけてくれてる。キツネはむちゃくちゃ、なんでもできたり、化かしたりできるんですけど、人間は知恵しかない、知恵と力しかないっていうのは、人の限界っていうのを、よく示していて、後半の実際あった話についても、なにかすごく戒めというか、警鐘を鳴らすような存在として、感じました。

小田嶋—ありがとうございます。キツネが人の子を産むことはあっても、人がキツネの子を産むことはないっていうことですが、じつは、動物の子を産むという話も、聞いたりするんですよね、裕子さん。

山田裕—動物の子を人が産む？ …聞いたことないよね。

小田嶋—すいません。聞いたことないですか、はい。それで、人間は知恵しかないけれども、キツネには化かす力がある。(ここで化かす力っていうのは) 幻の世界を見せてくれる力みたいなものなのかもしれませんね、キツネに誘われて、そっちの世界に行ってしまうということは、はい。それで、キツネと人との、つながっているような、切れてるような、その関わりあいみたいなことと関係することだったと思うんですが、あと、どなたかありますか？

H (女性) —キツネは野生動物ですから、ずっと人間との関係は、ある種の距離もあったし、緊張感もあったと思うんですね。それでさきほど、栗駒からいらっしゃった方が、いまはタヌキが十でキツネが一とおっしゃってましたけれども、昔はもっとキツネも… おそらくタヌキはキツネよりも繁殖力が上だとは思いますが、キツネの数も昔は多かったんじゃないかと思うんです。それで、里山というか人里に降りてきた時に、ねられるのはやはり家畜であったと思うんですね。人間にとっては、鶏（とり）とか、やはり家畜が狙われたと思うんですね。人間にとっては、それはタンパク源であって、大きな打撃だったと思うので、ずっと、キツネとの関係で言えば、自分の命がとられるとかいうよりも、そういう経済的なことでの「やられた」度合いっていうのが大きかったと思うんですね。それでさきほどお話の中に、漢方薬にキツネの舌が使われていた、また毛皮が使われたというところで言えば、やっぱりキツネも、人間にとっては退治しなければいけない、金になるんだって対象でもあったと思います。だからすごい敵対関係がお互いにあるって、かなり緊張した関係ではなかったかと思います。そうすると、なに

か事故とかが起こったときに、キツネにやられたとか、家畜が殺されたりとかしたときでも、「ああ、キツネにやられたんだからしょうがない」ってあきらめもあっただろうし、それから知恵くらべみたいところで、「じゃ、こんどは、やられないようにどうしたらいいのだ」っていう知恵の競い合いみたいのものも、同時にあったと思います。だから決して、今飼われてる犬や猫のような、愛くるしい存在としてあったとは思えないです。それでお話も、多岐にわたるものがたくさん出てきたのではないかなと、私は思いました。

あとですね。よく「キツネ目」っていう目を表現するときありますよね、顔で。それから「キツネ火」とかいうのもありますよね。キツネ目っていうのは、陶器の置物であるとか、昔の絵ですよね、「鳥獣戯画」の時代から書かれてきた目っていうのが、一本線みたいにして書かれていますよね。あれが実際のキツネを見ますと、動物園とか、『北の国から』とかの、実際のキツネを見ますととても愛くるしい目をしていますね。だから、絵とか、陶器とか置物とかになったときの表現のされ方というのは、たぶんに神格化されたような存在として、昔からあったのではないかなという気がします。

小田嶋一はい、ありがとうございます。いま指摘していただいたことの中で、大切なあとと思ったのは、昔話の世界と現実の世界、両方キツネがいるわけですけども、現実のわれわれと先祖たちが自然の中で暮らしていく中では、キツネと人間っていうのは、やっぱり、命の糧とかかわるような敵対関係でもあったっていうのは、それはたしかにそうだと思うんです。でもそれにもかかわらず、お話の中では、なにかとても親しみのある近しい存在でもあるという、その不思議な二面性みたいなものが、たしかにあるかなあとと思います。で、現実の実話の中には、キツネの人間と対峙する影のようなものがあるのかなあと思いました。

Ⅰ（男性）—キツネに化かされたという実話を、何話か聞いたことがありますので、せっかくだからご紹介します。

小田嶋一お願いします。

Ⅰ—いちばん最近の話だと、平成十年代に、山形県の鶴岡市で猟師さんが、ちょうど今時分に、ウサギ狩り、ウサギ巻きに、十人ぐらいで鉄砲持って出かけたけれど、一人は帰ってこなかった。で、その方は翌春、雪が消えてから、遺体が見つかるんですけど、それをみんなは、「キツネに化かされたんだな」っていうふうにおっしゃってました。それでキツネに責めを負わせて、「だれのせいでもないんだ」っていうふうにお互いが納得できるっていうふうに語っていた。ほんとにその話聞いたのが数年前ですけど、近年でもそういうふうに語られている、ていうことがあります。

あとは、戦後の話ですけど、昭和二十年代に、新潟県の村上市の山熊田って集落のおばあさんが、まだ若い時分に、山菜取りに山に行ったら、いつも歩いている山道で道に迷って、同じところに何度も出てきてしまう。で、怖くなって、「お稲荷さん、助けてけれ」って言って、お握りを目の前にお供えて、「おらを無事に家まで戻してくれ」って、なんども祈ったら、急に目の前が明るく開けてきて、そしてぶじに家まで、ふだん通りの山道に戻ってこれたんだっていうお話を聞きました。その人はキツネを信じていたおかげで、無事に戻ってこれたらしいです。という話を、今でも語る人がいます。

あとはですね、明治の十年代の新聞を、みなさんもご覧になると面白いと思いますが、一番出てくる動物がキツネです。山形新聞にいたっては、毎週出てきます。いずれの話も、だまされたとか、キツネ

と結婚してしまって、どうのこうの、たいへんな事になってるというような話が、事実のように書かれています。それを読み手の当時の人はどう思って読んでいたのかなってというのは、ちょっと分からないんですけど、同列にお化けの話も出てきます。半信半疑で読まれていた可能性も高いんですが、山形新聞だとか岩手新聞の明治十年代で一番出てくる動物がキツネ、いずれも人を化かすという話です。だからなにも、みやぎ民話の会の方々がお聞きになった話が、荒唐無稽な話ではなくて、明治期には各所で頻繁に語られていたんだなってことは、みなさんも明治の新聞を見ると確認できると思います。

小田嶋—貴重なお話をありがとうございます。村上さんは、野生動物としてのキツネについても、お詳しいですか？

—詳しくはないですけど、ミミズの話が出てきて「ああ、面白い」と思ったのは、ある猟師さんがキツネを捕るときに、肥溜めにたかってくるネズミを捕りに来るキツネを待ち構えておいて、鉄砲を構えていた。肥溜めでミミズが繁殖して、ネズミがそれを食べにくる、あるいはモグラが食べに来るのを、食物連鎖でキツネが上位にいて、その上に人間が立ってた、という話は聞いてます。

小田嶋—ああ、そうですか。ありがとうございます。そうすると、お話の中に出てくるミミズと肥溜めってというのは、すごく関係があるんですね、キツネとね。ありがとうございました。

J (女性)—さきほど、最後の実話の、怖い話、お嬢さんがじつは自殺したのかもしれないけども、それをキツネに背負わせ、受け入れ難いことをキツネに背負わせることで、なんとか受け入れてきたのではないかというお話を、してくださったと思うんですけども、それとちょっとつながるかもしれないんだけど、前半の、最初の方のいたずらキツネとかね、ひょうきんなキツネから、最後の方の恐ろしいキツネまでうかがいまして、もしかすると、キツネというものに託して表現している、じつは私たちの内、内なるキツネというかね、自分の中にある、いろんな非情なものであるとか、それから醜いものであるとか、いじわるなものであるとか、嫉妬であるとか、そういう怨みであるとか、そういうものを生の形で表現しにくいものを、キツネというものに託して表現しているけど、これすべて、自分の中にあるものなのかなというふうに感じました。

小野さんが始めのところで、影ということについて言及なさっていたのですが、その意味とは全然違うことを言っているのかもしれないけれども、私としては、影の中に、明るいところでは決して認めえないものを、影として、影の中に押し込めるといいでしょうか、でも本当はその影の中に自分の…自分自身はすごく立派に、常識的にふるまっている自分というものの影に、そういうもう一人の自分がいる、もう一つの自分の世界があると、その影の世界…

じつはね、私、もう非常にいい人のふりして過ごしているわけです。でも夜ね、夢を見るととても悪い人なんです。恐ろしいことをしたりね、してるんです。ほんと目が覚めて、びっしょり汗をかいてたりしてるんですけど、じつはそれももう一人の自分で、そこ全体を受け入れないと、人としては非常に一面的で、半面的なものなんだろうなと思いつつ、なかなか、そのところは、まだまだいい人のふりして過ごしているんですけど、キツネというものが、そういうもう一人の自分というものを、いろんな形でね、見せていてくれるというところに、民話の、ふところの広い豊かなものを感じました。

小田嶋—ありがとうございます。ほんとうにいいご意見をありがとうございました。いいふりしてるのは、

みなさん、わたしもそうですし、みんなそうだと思います。その光と…実体と影、光と影の関係っていうのは、もしかしたら、人とキツネの映し合いにもあるのかなと、いまのご意見から感じました。それから、とっても楽しいキツネが出てくる昔話から、恐ろしいキツネ、得体のしれないキツネが出てくる実話の、実体験の話も、それも同じキツネなんだけど、光と影みたいだなあっていうのを、ふと思いました、分けられないというところで。

柴田—いま、民謡を覚えようと思っているんですけども、その中に、『秋の山唄』って唄があるんですね、すごい難しい唄なんです。ここで一番が、「奥州涌谷の篁岳さまよ、山こ繁盛の、はあ守り神」と、これが一番なんですね。二番になると、「はあ、気になる、気になる、お山のキツネよ、これほど待つのに、はあなぜコンと鳴くよお」っていう、これを今日はろうろうとして歌いたかったんですけど。いや、歌えないんですけど。すみません。あの「守り神」で、「山こ繁盛」、で、私はキツネを待ってる。約束したのか、どうか知りませんが、山でね仲良しなんですよ。そのキツネを恋焦がれてるっていうか、待ち焦がれてるっていうね、そういう時代があったのかなあと。なんかそういうほんとに動物と一緒にというか、なんかこの「秋の山唄」、これも、秋の山唄なんですよ。ま、わびしいというか、さびしいというかな、物悲しいものをたたえながら、「山こ繁盛の守り神が、このキツネがなあ、なぜ、コンと鳴くんだけ」っていう、よく思えて、来年、もしここであったら、ご披露申し上げたい。そういうことです。

小田嶋—ああ、残念ですが…ありがとうございました。

C—二度目の発言になるので、長くなったら「止めろ」と言ってください。後半の部分のお話を聞いて、ほんとに身につまされるっていうか、いまの社会を反映しているような気がしました。医者のお話ね、で出産の話、それが失敗するという話、お婿さんに入ったんだけど、いびられちゃっていじめを受ける。いじめですよ、これ。ほんとに身につまされるっていうか、現実の問題を、いわゆる民衆っていうか、庶民の人たちは、こうゆう形で残していったんだなあと、痛切に思いました。でやっぱり、こうゆう問題あるんですよ。いま、新聞沙汰になってるような言葉を使いましたけども、やっぱり、たとえばいじめにしても原因が分からないっていうのが普通でしょ？ キツネにするほかないじゃないですか。だってそれ言えない、そういう世の中になってしまった。

それと、一回目の話した時に言い忘れてんですが、みなさんもお存知だと思いますけど、英語ではキツネのことを fox といいます。vixen という言葉もあります。それで、これはずいぶん古い単語なんですよ、英語では。で、ドイツ語ではですね、Fuchs っていうんですよ。それでその訳、解釈に、「すばしっこくて、ずるがしこい」っていう、そういう訳がついているんです。だから、説明していただきましたけども、キツネって非常に動きが激しいっていうか、人間の目につかないんじゃないかと思うんですね。私は小学生のころ、ちょっと知ってる人が猟師だったものだから、キツネの襟巻して、寒い日には耐えてましたけど、そういう意味で、僕さっき言いましたように、キツネっていうのを身近な存在だったんだ、それはあるんだろうなと思います。それで、イギリスではですね、キツネをですね、貴族が犬を使って追いかけて、犬同士をけんかさせてですね、捕まえるそういう娯楽っていうか、趣味っていうか、そういうのが流行した時があるんですよ。それほどまでに、イギリスでもキツネがたくさん身近にいたっていう、いまどうなってるか、私全然知りませんがね。ドイツも同じだったんだろうと思いますが、それについては、辞書的な意味しか分かりません。

それと、僕も作品読んでいないから分からないんだけど、イソップ物語にやっぱり、キツネ出てくる

んじゃないかと想像するんですよ。それと、『遠野物語』にも、お百姓さんの家の裏側に墓があるんだけど、そこになんか、怪しいものっていうのが、関係しているような感じがしました。姥捨て山も同じですね。

小田嶋一はい、ありがとうございました。

小野一いま、イソップのことを言われたんですけども、冒頭で話した「ツブとキツネの走（はせ）っくら」とか、話を省略いたしました、**「カワウソとキツネ」**のご馳走をしあった話とか、ああいうのは、あきらかに、室町時代に入ってきたイソップ物語からの転用だと思われます。日本古来の民話のなかには、意外にこの話は少ないんですね。そして人とかかわりでの話が圧倒的に多いのが、日本のキツネ話なんですの。

そして最後の方で、山田さんに入れていただいたんですけど、「キツネの効用」という言い方もおかしいですけども、あるお嬢さんがいたと。そして、いまとのお嬢さんの概念がまったく違う。一時代前は、婿に行くってことは、たいへん貧乏な家の次三男が、力をあてにされて、労働力として行かされるっていうことが、多かったわけですので、座るにしても囲炉裏がありますと、主人が座る横座があり、嬢座って奥さんが座る、お母さんの座るところがあり、木尻は嫁さんの座るところで、婿さんの座るところはなかったって言われるんです。で、お父さんから民話を聞いたという一人のおばあさんは、「自分の親は婿だったので、夕飯後の団らんにも加われなくて、寝部屋に追い込まれて、そこで子どもあやしながら私たちに話語ってくれたんだよ」と、その話を覚えておられました。ちょっと話を戻しますと、そうゆうお嬢さんが、夜になると、寂しいのか実家へ戻っていくんだそうです。実家でさとされて、また次の日、婿入り先に戻って働く。また夜になると寂しいのか、実家へ戻っていくことを繰り返していたそうです。そしてあるときに、「行くはずのねえ崖っぷちさ行って、そっから落って死んだんだ。行くはずのねえ崖っぷちさ行ったんだもの、『キツネにひかされたんだべよ』ってことになったんだよ」と話だったんです。

つまり、「婿入り先の労働が厳しすぎる」というと、婿入り先が傷つくわけですね。それから、「そんな働きに耐えられないような息子を婿によこしたか」といえば、婿に出した実家の方も非難されるわけです。だれも傷つけないように、婿さん自身さえもそんなことで崖っぷちで死…もしかしたら、自分で死んだのかもしれないんです、崖から落ちて。でもその婿さんさえ傷つけまいとするかのように、「行くはずのねえとこ行ったんだもの、人間が。キツネにひかされて行ったんだべよ」と、このやさしい言葉で、まわりを傷つけないっていうか、まるくおさめるっていうと、ちょっとあれがありますが、いま私たちの周囲にこういう言葉があるだろうか。あるいはこういう存在を身近に感じて、そしてなにかにぶつかったときに、「そんなはずねえもの、キツネのせいだべよ」というような、セリフが出てくる余地があるんだろうかって考えると、ちょっと寂しくなったりいたします。

ですからキツネっていうのは、やっぱりとっても、日本の民話にとっては、大切な働きをしてくれていたし、それから生きていくうえでの仲間でもあったんですね。決して人間に飼われることはないし、ニワトリなんか食ったりして、怒られる存在ではあったんですけども、キツネっていうものに対して抱く、一種の非常に近い感情を、わたしは語り手の方々に会うたびに感じて、それを不思議に思うのです。以上です。（拍手）

小田嶋一ありがとうございました。なんか、総まとめをしていただいたような感じなんですけど…ぜひなにか、

あと言いたい方ありましたら…はい。

K (女性) 一二つほどあるんですけど、わたし、小牛田出身、美里町出身なんですけど、小牛田の昔話の中に、こういうことがあったというのの中に、小牛田のお医者さんが、夜、旦那さんが迎えに来てね、「うちの奥さんが、はっぱり子ども生まれないから、ぜひ見てくれ」って言うので、お医者さんがいっしょに行きました。それで、すごい難産だったんですって。それでもなんとか子ども産まれてね、そしてその旦那さんが、お医者さんを送って帰ってきて、「ほんの少しだけでも」ってお金渡して。そして次の日の朝起きたら、そのお金が木の葉っぱだったって。で、そのお医者さんが、「ああ、キツネにも難産ってあんだなあ」っていうのがね、載ってたのが一つ。

それから先生が今、お話になったことなんですけど、あたしが小さい時に、よくカワに入って、朝起きたらカワに入ってた、「ああ、いいお風呂だった」とか、肥溜めっていうんですけどね、肥溜めに入ってた、「ああ、いいお風呂だった」って話、よく聞いて、「キツネにひがれたんだどや」っての、ずっと聞いてたんですね。それでわたしが大人になってから、母親に聞いてみたら、「ああ、あれはな、えらい酒飲みで、毎日のようにカワさ入ってた」て、肥溜めとか。でその人は恥ずかしいから、ね、「キツネにひがされた」って、語ってたんだと。そしてそれは、大人が分かって、それに乗っであげてたんだね。そして子どもには、危ないから、夜そうやってっと、キツネにひがれっから、夜出はったって、わがんだないよ」って、子どもにはゆってたのね。ほしたら大人になったら、それを聞いたんですよ。だから、「あ、大人は、ちゃんと分かって、キツネにひかされたんではないんだけど、それにちゃんと乗っがかって、話うまくしてたんだな」っていうのがちょっと分かったんで、ぜひそのやさしさ、ね、大人のやさしさ、それをちょっと思い出したので、語らせていただきました（拍手）。

小田嶋—ありがとうございました。とっても参考になりました。

L (女性) たくさんのお話、ありがとうございました。前半のお話で面白いなあと思っていたのが、いたずらとか知恵比べがあったときに、トラとキツネの競走で顕著だったように、肉体的な力が全然違くても勝てたりするっていう、実際持っている暴力とは違うところの力で勝負をできるってところが、すごいお話としては面白いなあと思っています。

それで後半のお話になりますと、キツネが持っている側面をになっているような方々の、実際、体験談としてのお話になっていくわけですが、わたしちょっと、「葛の葉」の研究をしてたんですけど、そのときに「葛の葉」の物語自体も、社会的にその時弱者だった方々が、やはり自分と重ね合わせて語る事が多かったってお話が、印象的に残ってて、その弱者でも、知恵比べやいたずらみたいなのところでは、平等に遊べる、というか戦えるみたいな、ま遊べるに近いと思うんですけど、そういう側面も、きっと後半のお話の中にもあったと思うんですけど、ちょっとそれよりもっと切実なものの方がやっぱり印象に残るし、いたずらとか遊びとか、そういうものはやっぱり、それよりも切実なものや怖さみたいなものの方を感じてしまうっていうところが、最近のお話や、今にしていたずらや遊びや、本気じゃないけど戦えるみたいな、ものがあるのかなっていうのと、私が個人的にやっていた「葛の葉」の中にも、いたずらとか本気じゃない遊びみたいなもの、でも真剣なものが、あるのかなということをこれから考えていきたいなと思いました。ありがとうございました。

小田嶋—ありがとうございました。あ、じゃあ、続けてお願いします。

M（女性）—すみません。ちょっと話がとんでしまうかもしれませんが、「キツネと産婆さん」についてのおはなしは、とっても気になっていて、構造がとっても複雑なんじゃないかと思っていて、最初なんか、子ども、未来のようなものをお腹に抱えた方が、話者となって話しながら、産婆さんが杉の木の下で跳ねている描写があったんですけど、その描写はなんか、キツネといっしょに居るというか、おんぶされ、おんぶというか、こちら辺にいっしょに居て、産婆さんとキツネが、いっしょの身体で動いてしまっているような描写があつて。その後に、産婆さんがいなくなってしまうみんなが探すときに、足跡は別々にあったという描写もあった、そのときに離れているんだって。その後に足跡も消えて、引きずられた跡、一本だけが残る。その結果、未来のようなものが、産婆さんといっしょに消えてしまう、とっても不思議な話だなあと思っていて、すごく身体に関わっているような…すみません、前の話とずれてしまったんですけど…

小野—「葛の葉」の話と、産婆さんの話、二つの非常に重要な話のご指摘をいただいたと思います。弱者の話が裏にあるかもしれないという「葛の葉」の背景があるものですから、ここでどの程度採りあげていくべきか、わたしどもも判断が、わたしどもっていうか、わたしの判断も、難しかったんですけども、そこはまた別に考えていきたいと思います。

それから産婆さんの方の問題は、それこそさっき山田さんも言いましたけれども、産室には男は入れないっていうのが、日本の強い風習なんですよね。ついこないだまでね。このごろは、お産にも男の人が立ち会ったりしますけれど、男は産屋にも入らないという。そして、そういう厳格な男女の差別をもっていた時に、キツネが探し求めていくのが、必ず男の医者なんです。産婆さんを探しに行けばいいのと思うでしょ、お産の助けですから、技能のある産婆さんを訪ねて、産婆さんをお願いすればいいのに、一つの例外もなく男の医者を訪ねて行ってるんですね。わたしはこのところは、考えてみるべき問題をひそめていると思うんです。そしてその男の医者は、多くの話では実在している、「すぐそのなんとか医者だよ」というふうに、実在も暗示しているんですね。ですから産婆の手から男の医者の手へ、出産の形態が変わっていくときの、なにかがもしかしたら、背景にあるかもしれない。それは思いつきかもしれませんが。そういうことなども、問題として含んでいる。

そしてキツネは、そのお礼に、さっきお金と思ったら木の葉だったっていうこともありますけれども、ほんとうにお金をよこすキツネもいるんですよね。そしてお金ではないけれども、ひょいと置いていったものがあるんで、なにかなと思うと、よく太ったヤマドリをお礼に置いていったとかですね、それから立派なお膳が送られた、なんだと思ったら、隣の村で結婚式があつて、そこでお膳が一つ消えて、それキツネが運んでって、そこにお礼に置いたんだろうみたいに、感謝の気持ちを表すキツネたちもたくさんいるんです。そのあたりの区別とか、分析とかっていうことは、これからの大きい問題です。

やっぱり私自身も、なぜ、産婆を呼びにいかないで、一つの例外もなく男の医者を呼びに行くんですね、キツネはそのときにね。そして、ひかしていくときには女に非常に冷酷な扱いをしているっていうようなこともあつて、キツネという存在の不思議は、これからわたしたちが生きていくうえでも、すごく重要な鍵を握っているんじゃないかという気がいたします。

小田嶋—ありがとうございます。ほんとうにたくさんのご意見を出していただいて、私たちもほんとに考えさせられることいっぱい、意見をしていただきました。ありがとうございます。なんかほんとうに、答えは出ないだろうなと思ってたけれど、ほんとうにこれだという答えは出ない、とてもたいへんな

問題、キツネっていうのはそういう問題なんだと思います。でも、いろいろみなさんに教えていただいたのは、一つは「気脈を通じる」っていうことが、一つのなにか手がかりになるのかなあ、と思います。人の世界とキツネの世界は、重なり合いながらも、ぴたり同じではないけれども、でもその中で、あちこち行きながらも、関わりあいたい、というか関わりあってきた。そこには、自然と人間や、動物と人間のことも、そしてのっぴきならない切実な関係も反映されてる。人間の社会の、またわれわれの内面の、いろんな弱さとか、差別とか、弱者とか、そうしたこともお話の中に反映されている。そのお話も、昔話から事実の体験談の「ほんとうにあったこと」っていうもののなかに、色んなレベルで、楽しい話から、恐ろしいせっぱ詰まった身につまされるような怖い話まで、光から影まで、いろんなものを含んで、そして、最初に言っていたように、区別をしてはいけない、区別することを拒否するような、そんな存在なのかなと、考えました。

みなさんもこれからいろいろ考えていただいて、またわれわれも、これを一つの手がかりとして、いろいろ考えていきたいと思います。今日はほんとうに、ありがとうございました。(拍手)

記録 小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

—以上—